

NO. 58
SUMMER
1977

英語展望

ELEC BULLETIN

オーラル・アプローチ実態調査
高校段階のPattern Practice



ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

NO.58
SUMMER
1977

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【国際展望】

テレビ映画で見た感覚・習慣のずれ	小暮和男	2
中野健作先生のことなど	後藤一正	4
仏英独の旅に想う	國弘正雄	6
Intensive English Courses	Douglas W. Overton	9
Oral Approach に関する実態調査 ——アンケートの集計と考察(II)——ELEC 教材・教授法研究グループ		13
高校段階の Pattern Practice	大橋菊子	23
バラッドの世界 (その8)	平野敬一	27
英語の諺 (その6)	戸田 豊	31
何を言わないかの言語学	原口愚常	36
【Forum】 現代英語における直喩表現	外山敏雄	42
【新刊書評】 『カレッジクラウン英和辞典』第2版	三浦新市	44
新刊紹介		46
新刊案内		47
展望通信		48

表紙デザイン

太田英男



テレビ映画で見た感覚・習慣のずれ

KOGURE KAZUO

小暮和男

随分昔のことになるが、アメリカのテレビ番組最高賞である「エミー賞」をねらってテレビ番組を出品したことがある。出品作品名は『光が欲しい』という、眼の角膜移植を扱ったヒューマン・ドキュメンタリーであった。

医学関係のことなので詳しいことはよく判らないが、当時（約15年前）は、角膜の提供者——提供者とは、死亡した場合、数時間以内に自分の眼球の角膜を希望者に提供しても良い、という遺書を残していく人——の数のほうが、その角膜をもらい受けて自分の視覚を取り戻したい、と願う人の数より圧倒的に少なかった。その結果、当然のことながら、角膜の恩恵を受けることの出来る幸運な人の競争率は非常に高くなった。

私たちが製作したテレビ番組はこの問題を扱ったものである。

角膜の提供者が死亡すると、病院はすべての角膜受取希望者に同時に電報を打つ。そして一番乗りの人のみが、角膜の提供を受けた。

1秒でも遅れて病院に到着した人は、たとえ2番目であっても角膜はもらえない。病院の玄関で丁重に断わられて帰ってゆく。

エミー賞に出品するには、フィルムを完全な英語版にしなくてはならない。私たちはアメリカ人のアナウンサーをスタジオに招いて英語版の製作にかかった。

ところが、上記の場面にさしかかった時、突然、アメリカ人のアナウンサーが「不愉快だ！」と、仕事を忘れて激怒し始めた。驚いた私たちは、その理由をただしたところ、彼は「角膜を真剣になって求めて病院に来た患者が、残念ながら断られる時、看護婦はそれを笑いながら通告しているのが、腹にすえかねる程不愉快だ」と説明した。

私達は啞然とした。

この「看護婦の笑い」とは、私たち日本人にとっては「なぐさめ」の、心のこもった優しい、「相手を傷つけないため」の「女の温い微笑」に他ならない。突っ慳貪の笑いのない顔で「もう先着がありました」と、通告される時のことを考えた方がやり切れない。相手を慰める

ために、看護婦も「必死になって」微笑するのである。

よく、「東洋人の不可解な笑い」ということが欧米人から指摘される。私はこの意味は、上記の「笑い」と、事情は異なるが同じ意味だと思う。相手の英語が判らない。その場のムードをこわす。折角一所懸命説明してくれている相手を「傷つけ」てはいけないと思う。その結果「ニヤッ」と笑う。——これが東洋人の不可解な笑い、と言われるものである。善意が悪意にとられる。

こうした誤解の有無を十分知っていると思っていたアメリカ帰りの私でさえ、こうしてみごとに失敗した。

理由を聞いて納得した当のヤンキーのアナウンサーも、自分はこの場で判ったが、アメリカに出品して審査された時、アメリカの審査員は自分と同じように、この看護婦の笑いの場面できつと不愉快になり、作品にとって不利になるから、この場面はカットした方が良いと提案した。しかし、この場面こそ大切である。カットは出来ない。しかも、ドキュメンタリーなので撮影のやり直しはきかない。色々協議したが、良い知恵も浮かばないので、結局はそのまま出品した。そして輝かしいエミー賞はとり逃した（負け惜しみに、作品の質そのものは良かったが、このシーンのために落選したと今でも信じこんでいる）。

商売柄、テレビの番組をヨーロッパやアメリカに売ったり、そこから買ったりすることが多い。しかし、その場合、つくづく日本と特に欧米との間の感覚のずれの大きさにショックを受けることが多い。

全般的に言えば、不思議なことに、われわれ日本人が「良い」と思う点で彼らは「退屈さ」を感じ、彼らが良いと思う箇所をわれわれは「退屈だ」と感ずる。従って、外国からドキュメンタリーなどのフィルムを購入する時は、45分以上のものを原則として買い入れ、それを再編集して日本人好みに短かくする。そうしないと、とても退屈な作品になってしまい、日本人は見てくれない。

例をあげて説明すれば、日本の国のすべてを紹介するために最初から英語版で作った JAPAN という映画がある。交響曲のように「天」「地」「水」「人」の4部にわ

かれた非常に良いできばえのドキュメンタリーで、カナダの大使館では新人に日本をオリエントするための教育素材に使った程である。この中で、農村の中卒が大勢で都会へ集団就職するシーンがある。汽車の中には黒い詰襟の制服に身を固めた中学生が一杯いる。——大体、学生がユニホームを着ない欧米人にとっては、この黒一色の学生服が異様に写るらしく、時には金ボタンの関連で「バンド・マン」かと訊かれることさえあった——駅のプラットフォームは、この学生を見送る両親や兄弟姉妹で文字通り芋を洗うような混雑ぶりである。汽車がいよいよ動き始める。見送る人も見送られる人も一斉に涙を浮かべ、ハンカチを目に当て、別れを惜しんで泣き始める。われわれも少しはジーンとしてくるシーンである。でなくとも、少なくともごく普通の見なれた光景である。ところが、ここで、必ず、試写に来ている外国人は声を立てて笑う。不思議である。

モロタイ島から発見された元日本兵の中村さんが昔の奥さんと逢う。しかしその奥さんは別の男性と結婚している。中村さんは「俺はジャングルの中で30年も我慢していたのに、なぜお前は我慢できなかったのか？」と、激しくなじる箇所のある名作がある。こちらは真剣になってこの素晴らしいドキュメンタリー——（フジテレビ製作）を欧米にも輸出しようとして一所懸命になっているのに、この場面に来ると、見ている彼らはまたしても大声をあげて、さも楽しそうに笑う。つや消しである。こちらが真剣になっている時に笑われる程「はぐらかされる」とことはない。

くどいようだがもうひとつ例をあげよう。たまたま映画雑誌を読んでいたら、ユーゴに留学している平野京子さんなるお嬢さんが、ベオグラードで上映された大島渚監督の『愛のコリーダ』を見たところ「大笑いの連続」であったと書いている。私自身もバリでこの映画のノーカット版を見たが、笑うようなシーンはどこにもなかった。ましてや「大笑いの連続」とは何事であるか?!

この『愛のコリーダ』については、私自身は批判的な見方をしているが、ただし「最後だけは良かった」と確信している。ところが、この平野さんの記事によれば、ベオグラードの観客の批判はこの映画の最後の部分に集約しているのである。

そう言えば、西ドイツでも、このラスト・シーンだけが、わいせつという理由ではなく残酷であるという理由であったが、カットされている。

ここで話は、彼等の映画の「残酷さ」に移るが、日本のテレビ映画を輸出する時の最大のネックは、この日本製映画の残酷さにある。テンポが早い、という点を含め

て、比較的よく似ているテレビ界の日本と米国の間でも、この差は歴然としている。アメリカのテレビの暴力・セックス・シーン批判の強さは、われわれ日本人が見なっていて良いものと私は常々考えている。もし、日本の「子供向けアニメーション」を、アメリカで放映したならば、全米の視聴者が激怒するであろう。彼らの良識と、子供をテレビの暴力から守ろうとする姿勢は、正しくそして強固である。ひとつひとつ、例を挙げて説明したい程であるが、枚数の関係で許されない。ただ一口で言えば、アメリカのテレビに対する暴力批判は、日本の視聴者、いやこの雑誌の読者のどんな想像よりも遙かに強いものがある。あなた方の想像を絶すると言って良いでしょう。

反対に、私は、日本の子供向け番組は、極く限られた少数の例外を除けば「強調符文化」に過ぎないと思っている。アニメーションのみならず、子供向け番組には、なんと「強調符」が多いことか!（…これも強調符!）一度、読者の皆さんも、テレビを見ながら、子供番組のセリフを聞いてごらん下さい。そのセリフは殆んど「!」をつけて良い強調された激しいセリフばかりです。例えば、槍玉にあげて悪いが『ママとあそぼう! ピンポンパン』（タイトルにも強調符がついている）にしてからが、「ドナル」セリフの連続である。しかも各番組の大人の司会者の子供に「阿諛追従」することの馬鹿らしさ。大人は子供にこびる必要は毛頭ないのです。子供を墮落させているのは、日本の大人と、その媒体であるテレビです。「子供を信じられない親は親ではない!」（強調符）と言いますが、私は自分の子供を信じません。私の方が偉いのです。ただし、10歳の子供には10歳の程度に応じた知恵に対して信じます。しかし、10歳の子供が全幅の信頼を寄せると主張すれば、私は即座に拒否します。10歳の子供には10歳の知恵と経験しかなく、その範囲内で子供を信ずることが子供を信頼しているということの正しい意味なのです。10歳で20歳の知恵と経験を要求できる人は天才です。その天才には私は脱帽します。

この点をわきまえないのが、日本の子供番組の全般的傾向です。皆さん! 日本のテレビを見ながら、どの番組が世界へ輸出できるに値するものであるか、その質を一度考えてみて下さい。私達が世界を相手に、「これが日本のテレビ番組です」と言って、自慢気に言えるテレビ番組がどんなに少ないか、皆さんはきっと気がつくことと思います。日本のテレビ番組で——テレビのセット台数がどんなに多いか、とか、テレビの技術がどんなにすぐれているか、とか（この点にも私はすごく疑問的です）の点を除いて——どれだけ、欧米に自慢して出せる

（P.35 へつづく）



中野健作先生のことなど

GOTŌ KAZUMASA

後藤 一正

私の英語との出会いは、戦前、7年制の、台北高校尋常科に入学したときに始まる。尋常科で、曲りなりにも、4年間、英語を勉強したが、高等科に進んでからは、戦争中だったこともあって、ドイツ語が週12～3時間に対して、英語は、3時間程度という教程だった。大学生活は、戦後に送ったが、少々へソ曲りの私は、時代の流れを先取りして、英米法の勉強をする、などということせず、どちらかという、独法の方に惹かれていたので、英語との縁は、遠くなるばかりだった。

そんな私が、中年にさしかかかってから、ロンドン・ジャパン・トレード・センターに勤務することになって、改めて英語で苦勞するハメとなった。その後、通産省に戻っての一時期、アメリカ、カナダ、EECなどとの、繊維にかんする貿易協定交渉に携わり、さらに、最近、100パーセント外資会社に転じて、私の英語との格闘は、何の因果か、まだ、続いている。

*

台北高校尋常科で、私どもに初めて英語を教えて下さったのは、先年物故されたが、中野健作先生とって、たしか東京高師のご出身で、しばらく前、イギリス留学から帰られた方だった。クラス担任もして頂いて、私は、ずい分、ご迷惑もかけた。いまでも、慈父のように思い出されるが、たぶん、今の私よりは、お若かったかもしれない。

文字どおりの「40の手習い」で英語の勉強を再開して以来、私は、東京で、高名な会話学院のお世話にもなったし、ロンドンのベルリッツ語学学校にも通った。個人教授をうけた先生に至っては、数え切れない位だが、教えをうけた内外の先生達を通じて最も優れた英語教師の一人が、ほかならぬ中野健作先生だったと思っている。先生がつつちかって下さった基礎がなければ、30年近い空白を経て、再びやり始めた私の英語を、多少とも実用に供しうるものとするとは、不可能だったに違いない。

*

中野先生には、数多くのことを教えて頂いたが、印象

に残っているのは、先生が、発音と、朗読と、暗誦とを、極めて重視されたことだ。文法的なことも、いろいろ教わったはずだが、他に文法専門の先生がおられたせいもあってかして、中野先生に、文法で絞られた、という記憶は、あまりない。

発音については、とくに厳格で、[æ], [a], [ʌ], [ə], [f], [v], [l], [r], [θ]などは、徹底的に練習させられた。「下唇を嚙んで」とか、「舌が見えるように」とか、熱心に指導して下さった先生の温顔が、今でも、目に浮かぶ。のちに高等科に進んで、休講の時間などに、尋常科の新入生の、中野先生の時間の教室を通りかかると、「æ, æ, æ, æ...」という発音練習の音が、まるで春田の蛙が鳴くように聞えてきて、思わず、微笑させられたものだった。

台北高校では、1クラス40人が、尋常科4年を修了すると、本人の希望と、クラス担任の先生の指導とで、文甲、文乙、理甲、理乙の高等科4クラスに分散し、一般の中学から、入学試験を経て入ってくる人たちと、混ざり合う仕組みになっていた。中学からの人達のなかには、もちろん、4修組もいたが、多くは、5年卒業の人達で、1浪、2浪の人達も稀ではなかった。当時、その年頃のものたちにとって、1歳、2歳の年齢差のもつ意味は、かなり大きく、それだけで、ある種の威圧感のもとになるところへもってきて、中には、受験のために、文字どおり、「字引を1頁ずつ食べた」と称して、やたらに難しい単語をふりまわすものもおり、また、文法的な知識を誇示するものもいて、当初は、少なからず、圧倒されたが、その後の状況を、ごく客観的に振り返ってみると、こういった「単語派」、「文法派」より、中野先生仕込みの、「発音派」、「朗読派」の方が、進歩は、早かったように思われる。

後年、畏友國弘正雄先生が「只管朗読」を鼓吹しておられる一文に遭遇したとき、私は、忽然として、中野健作先生の授業と、若かったその頃の自分自身とを、なつかしく思い出した。

*

中野先生からは、尋常科1年、つまり、中1のときに、発音記号をも、丁寧に教えて頂いた。こんど高3になったうちの一人娘は、発音記号など、あまりよく知っているようにもみえないが、最近の英語のカリキュラムでは、どういう扱いになっているのだろうか？

余談だが、ロンドンにいた頃、コペンハーゲンに、講演旅行を頼まれたことがあった。一計を案じた私は、私のイギリス人の秘書の兄嫁（といっても、まだ可愛いお嬢さんだ）が、デンマーク人であるのに目をつけて、私の英文原稿の第1頁だけを、デンマーク語に直して、テープに吹き込んで貰い、それを、何が何だか意味は分からぬままに、発音記号に移したり、スピーチの冒頭に読み上げて、大いに大喝采を博した。もとより、貧弱な講演の内容を、せめても補うための、ご愛嬌にすぎなかったが、とにかく、発音記号には、こういう使い道もある。カタカナで書きとるに優ること、万々である。

*

話題をかえよう。近頃かなり頻繁に用いられる、「国際化」とか、「国際人」とかいう言葉にお目にかかるのと、私は、いつも、首をかき上げてしまう。「国際化」を英語でいうと、“internationalize”ということになるのだろうか、いじわるじいさんの的にいうと、internationalizeって何なの？ Americanize? Anglicize? Germanize? Gallicize? Russianize? Sinocize? Iberianize? etc. etc. とお聞きしたくなるわけだ。

もちろん、本当に意味するところが、そのどれでもあるはずがないことは、いうまでもなからう。

真面目ベースに立ち戻るならば、「国際化」とは、「(国内だけでなく) 国際的にも通用すること」であり、「国際的に受け入れられること」であり、「国際社会において敬愛されること」でなければならないはずだし、「国際人」とは、「世界のどこへ出しても、通用する人、受け入れられる人、敬愛される人」ということでなければならぬまい。そうなると、言葉の問題などは、全体からみると、眇(ぞろ)たるものになってしまう。早い話、英米人を含む西洋人たちは、オランダ、スイス、北欧諸国など、ごく一部の国々の人たちを例外として、決して外国語に強いとは思われないが、だからといって、これらの西洋人たちが、すべて、「国際化」されていず、「国際人」としての資格に欠けている、ということではないだろう。いや、日本では、むしろ、色が白く、インド・ゲルマン語属に属する言葉をしゃべる人たちは、すべて「国際化」された「国際人」だと、錯覚することの方が多いのではないか？

私たちにとって、優れた「国際人」たることの第一の条件は、まず、優れた日本人であることだと、私は思う。ここは、優れた日本人とは何か、を、議論する場所でもないし、また、私に、その用意があるわけでもない、お互いに、胸に手を当てて、「優れた日本人とは何だろうか、考えてみようではありませんか」というに止めよう。些細なことのようにだが、在外生活を送られたことのある方は、外人たちからの、矢つぎ早の質問に直面して、母国日本の社会や文化についての、自分自身のあまりの無知を、少なくとも、一度や二度は、反省させられた経験をおもちに違いない。われわれを生み、育ててくれた国についての、その長所も欠点も含む、正当な理解は、私によれば、優れた日本人であるための、ひとつの要件である。

第二に、「優れた日本人」という土台の上に乗って、世界の他の国々、およびその人々を、理解し、受け入れよう、という態度が必要だろう。つまり、心は開かれ、思考方法は柔軟で、他の立場を理解し、また、他の優れている点は、多に吸収していこうという構えが、「国際人」たるのつぎの要件ではなからうか、と思う。その意味で、「国際人」としての他のひとつの要件は、よい意味での、相対主義者であることかもしれない。

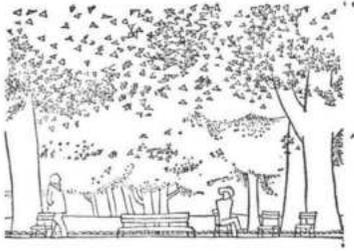
第三が、以上2点をふまえての上での、他の国々の人人とのコミュニケーションの問題だ。言葉の問題は、ようやく、ここで登場する。国際的に通用する範囲が最も広いのは、申すまでもなく、英語だから、英語の修得に励むことは、大へんけっこうだが、若い人たちだったら、英語ひとつに甘んずることなく、2つでも、3つでも、取り組んだらよいだろう。私の乏しい経験からだが、ドイツ語や、フランス語の知識が、英語の進歩の助けとなる場合だって、あると思う。

*

私の以上の定義によれば、外国語にたんのうな非国際人、ないし文化的無国籍人というもの、じゅうぶん、存在しうることとなる。一度周囲を見廻した上、お互いに、そうならないように、自戒しようではありませんか。

昔の人達は、「国際化」とか、「国際人」とかいう言葉は、使わなかった。古くは、「和魂漢才」といい、下って、「和魂洋才」といった。私は、もちろん、「国際化」の必要性、「国際人」養成の大切さについて、いささかの疑念ももっていないが、くれぐれも、それが、「無魂洋才」とでもいうべき解釈、運用に流れないよう、老婆心を申し述べたまでである。

(モービル石油常務取締役)



仏英独の旅に想う

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

1年半ぶりのヨーロッパだった。三木さんと同行の旅であった。

目的はいくつかあった。その第1は、フランスを中心に、いま漸く勃りつつある政治再編成の動きを、肌で感じてくることだった。白い共産主義とも、ユーロコミュニズムとも呼ばれる勢力が、どのような土壌の上で花を咲かせているのかを探りたい、という思いもあった。政治経済はもとより、社会的文化的背景においてである。

事実、イタリーではベルリンゲル氏をトップにいただく共産党は、是々非々主義に立つとはいえず、与党のキリスト教民主党と閣外協力の約束をとり結んでいる。マルキスト以外をも黨員として包含するという、驚くべき柔軟性を見せつつである。

他方、フランスでは、過日の地方選挙でミッテラン氏を長とする社会党と、共産党との連合が、右派のシラク前首相——旧ドゴール派である——との確執に悩む中道左派的な大統領ジスカール・デスタン氏の与党に2パーセント余の差をつけて、勝利したばかりである。識者の多くは、来春の総選挙でも、社共連合が恐らくは勝つだろう、と予測している。われわれが1時間半ほど会ったミッテラン氏も、その確信を潜め、堂々たる態度に終始していた。一方、ジスカール・デスタン大統領は、ランブイエの古城や、プエルトリコ島での第1回、第2回の首脳会議で会ったときなどは、精彩がなかった。

そう、ロンドンでの第3回首脳会議に、仏・英・独政府が、どういう立場で臨む目算かを推しはかるのも目的の一つだった。(残念ながら、ある意味ではもっとも面白いイタリーへの旅は日程的に不可能だった。ベルリンゲルやその周辺がなにを考えているかを、私としては一番知りたかったからである。)たとえば、カーター新政権や、とくにその人権外交、核政策などをどのように見ているか、などは興味深々なテーマだった。日本のいわゆる現実主義者——その多くは、ベトナム戦時代のアメリカの政策は、これをやみくもに支持した——の中には、カーターのアメリカに対しては、いらだちをあらわにするものが少なくない。かつての容米主義者が、いまや排

米に傾斜しつつあるすぎゆきは、それ自体、一寸した景観だが、それはさておき西欧のリーダーが、大きくさまがわりした現在のアメリカをどう受けとめているかには、大きな関心があった。

あわせて、日本経済の著しい対欧進出にどう反応しているかにも、われわれの興味は向かっていた。旧臘、土光経団連会長を団長とするミッションがEC諸国を訪れた際、激しい対日批判を浴び、義士に寝込みをおそわれた吉良上野さながらに狼狽したと聞くからである。とくに強い経済をもち、米、日、と並んで景気回復の機関車ともちあげられている西独が、たとえば日本の造船業がライン河に遊ぶ観光用の小船までも受注していることに痛烈な非難を投げかけたのは、さしもの日本の財界人にも、間打ちにあったような思いを強いたらしい。

とくに三弱といわれる仏、英、伊の政府関係者が、三強(!)の一つの日本に対し、どのような感情を抱いているか、そしてどのような論理で、自由貿易という大旗をすり抜けようとしているのかは、これまた興味をそそられるテーマであった。

日程はまずフランスの8日間からはじまった。その6日は、パリで、あとの2日をそれぞれ南仏のマルセーユとニースですごした。(マルセーユでの短い滞在中、私はしきりと横光の『旅愁』を思い出していた。昔日の繁華のおもかげを消退させたあの港町が、西欧と日本への横光の鬱屈した心情を思いおこさせたのである。)

フランスでは、大統領以下、パール現首相、シラク前首相——いまでは百数年ぶりのパリ市長に選ばれ、やがては駒を中原に進めるべく意気まことに壮んであった——。それに上下両院議長、元首相2人、前出のミッテラン社会党第一書記など、有力な政治リーダーを総めぐりする勢いだった。そのほか、ルモンド紙やフィガロ紙など、有力ジャーナリズムの担い手たちとも長時間懇談した。毎日、8時間ぐらいいは人と会った。

おかげで、すっかり錆づいていた私のフランス語も、ヒアリングだけは心もち回復した。なにしろ、フランス語

の集中詰訓練に均しかったからである。それに、現代フランス政治文化については、大学院の20単位分ぐらいは優に詰めこまれた。学生はともかく講師は一流だった。

インドシナ半島からの撤収という勇氣ある決断を行なったマンデス・フランス元首相は、いまでは静かに老いをバリで憩っているが、1時間ほど、大長老の一人として、客観的かつ長い歴史的な物差しで、現状と来年の総選挙の見通しとを、淡々と、しかし熱誠を籠めて語ってくれたのが、とくに印象に残った。

どうやらフランスは、社共連合政権を迎えるようである。ジスカール大統領が残る任期をつとめることになろうことを思うと、大統領は保守リベラル派、首相は社会党首という変則な事態がおそらくは招来されるのであろう。それがはたして現フランス憲法の不備に由来する憲政上の危機を招き寄せるのか、大連合という形で収束に向うのか、いまの段階では予断はむずかしい。ただいづれにせよ、こういう事態、つまりはかなり驚天動地的な事態が現出したのは、フランス社会、とくにそのエリート層がいまにかかえる高度の保守性、頑迷固陋とすらいえるほどの前近代性のしからしめるところであることは、ほぼあやまりない。

たとえばその意味でも先進的な北欧とくらべ、フランスの貧富の差はいまだに著しい。スウェーデンを1対5とするなら、フランスの所得の格差は1対22と際立って大きい。日本ですら1対10、イギリスは1対9と、OECDの報告書は告げている。日本がともかくにも大衆社会化したというのに、フランスはまだ高度の階級社会を温存させ、タテの移動性 (vertical mobility) は低い。

しかも現状を改革しようとする勢力への旧勢力の抵抗は、執拗かつ組織的である。ジスカール大統領などは、保守の側に身をおきながらも、近著『フランスの民主主義』(磯村尚徳氏の訳で邦文版が出ている)も示すように、現状改革のために懸命の努力を払ってきたが、旧ドゴール派の捲きかえしでことごとく挫折してきた。伊藤光晴教授が、彼を三木氏に、シラクを福田現首相に比ておられるのも、図式としては納得がいく。超保守派は、かなり強権的に、現状打破の動きを封殺してきた。

たとえば、かつてドゴールが、近くはジスカールが、資本利得税を導入しようとして、守旧派からの猛烈な抵抗に出会ったことはよく知られている。ドゴールの威信をもってすら、退陣直前だったこともあり、アカ呼ばわりをされ、ついに志を枉げざるをえなかった。



前西独首相・現ドイツ社民党総裁・ノーベル平和賞授賞
ブランド氏 (中央)、三木前首相 (左)、園弘氏 (右)

資本利得税という、いわば世界的に常識化し、共産主義でもなんでもない改革の方途が、めためたにされるとは、われわれの驚きをさそって熄まない。しかもその理由づけ、すなわちアカ呼ばわり、を知るに及んではなおさらである。フランスの守旧派のもつ「反動性」をこの挿話は端的に示しているといえるだろう。そしてそのことは、独禁法改正をたばにかかって押し潰し、ロッキードの解明が手きびしすぎるとして三木おろしに血道をあげた日本の旧勢力——いまの政権にわれわれはその濃い影をみる——との奇妙なパラレルを感じさせるのである。彼らが、たとえば日韓に関して、カーターの新政策に、ことごとくケチをつけようとしていることとも、これは無縁ではないだろう。

とにかく私はフランスはかなり重症だと診たてた。巷間、やかましくいわれるイギリス病よりも、である。時のすぎゆきに対し、最少限の対応をも肯んぜず、徒らに守旧と、自らの権益を守ることに汲々としていては、いづれの日にか大きなドンデンがえしを喰らうに決まっている。私自身は、必ずしも保守を否定するものではない。たとえば護憲という立場を固守する点では「すこぶるつきの保守」だが、歴史の進行に背を向けるだけでなく、時計の針をあと戻りさせることに狂奔するようでは、それは反動といわれてもしかたがないだろう。

私は、それとの闘いに心身を労しているジスカール大統領の中に、かつての三木氏を二重映しにしていた、と同時に、来年の総選挙で恐らくは泣きべそをかくであろう、超保守主義者の表情を想像し、半ば悼ましく、半ば愉快であった。

そしてことは他人事では必ずしもない。7月には参院選挙が、来年早々には恐らくは衆院の解散が待ち受け、日本も大きな流動期を迎え、さまざまなくみ合わせの連

合時代への突入は、ほぼ既定の事実だからである。

社会正義と平等を目差し、小さな改革をたえず積み上げていかないかぎり、そこにはドンデンがえししかないことを、フランス革命やバリ・コミューンの歴史はわれわれに告げている。そして来春、その歴史がまたもや反覆されるであろうことを、われわれもまた他山の石として意識にきざみつけるべきだろう。

イギリスは3年ぶりだった。海外の日本研究者としては恐らく最高の頭脳、サセックス大学のロナルド・ドア教授(社会学)——まだ50になるやならぬ若さである——の自宅で、1日清談の折をもてたのは愉快だった。お互いに旧知のことであり、三木さんと私とは、彼ととくに教育と南北問題について肩のこらない話し合いに終始した。彼は徳川期の教育についてすぐれた研究を物し、岩波から翻訳書が出ているほか、さいきんでは途上国問題の研究プロジェクトを、新興の意気に燃える new universities の一つサセックスで主宰している。

外国人とは思えぬほど正確かつ典雅な日本語を話すことも手伝い、われわれ2人にとっても重大な関心事である教育改革と途上国への協力問題に花が咲いた。彼が、入試くじびき説——ただし高校卒資格試験の合格者を対象に——を述べたこと、はとくに興味を惹いた。一方、イギリス人の日本研究者の7割以上が、まだ日本の土を踏んだことがない、という指摘には胸が痛んだ。アメリカの日本専門家には考えられぬ高率だからである。ポンドが、470円見当にまで下落した——私が最初に英国に杖を曳いたときは1,100円内外だった——ことが象徴するイギリス経済の苦難——ただし、フローは豊なくとも、住宅、下水、など下部構造面でのストックの大きさは、日本とは比較にならず、いま一つ付け加えれば、途上世界との人脈の敦厚さは問題にならない——がこのような事態を強いたのである。

ただドア氏が、あまり深刻な顔付きでないのは救いだ。イギリス人という、あの度し難いまでの生活人は、そうなまかななことでも弱音を吐いたりはない。何週間もの電力危機のさなか、彼らは平然としてロウソク生活に耐えたという。少なくともわれわれが安易にイギリス病を口にするのは、空疎かつ倣岸な独善だろう。

首相官邸、ダウニング街十番地のとりの蔵相官邸で会ったヒーリー氏も、いつもながらの人のよさを、赤ら顔に浮かべてわれらを1時間近く迎えてくれた。ちょうど例の社会契約(social contract)も3年目にさしかかり、成否を分けるやま場とて、倥傯のさなかだったにもかかわらずである。

いくつかの大組合との談合を了えたばかりとかで、顔面はいつもに増して紅潮していたが、笑みの寛宏さは従来に変わらぬ、話す内容も首をかしげたくなくなる位、明るかった。貿易収支すら上向きに転じ、ポンドも底値ながら安定の兆しをみせつつあるという。

北海油田に大きな期待をかけていることは明白だったが、おかげでイングランドとスコットランドが分裂しそうと、といたずらっぽく笑う表情にも余裕があった。大油田がスコットランド沖合で発見されたことから、蘇英間の対抗意識が再び表面化し、一寸した内政面の紛糾がもち上っているからである。

いずれにせよ、イギリス病について私は、フランス病ほどの深刻さを覚えない。フランスが後向きの姿勢の故に病んでいるとするなら、イギリスの苦患は、むしろ時代の先き取りをはかっていることに由来する。世界にさきがけて代議制民主主義を確立し、産業革命を成就し、福祉国家に移行したあの国は、またしても新しい文明型態に、一足さきに向いつつあるのかもしれない。

それは脱工業社会という出来合いの評語を冠するには、いまま少し錯綜したものであるのかも知れず、その正体をみきわめるには、若干の時が籍されるべきだろう。

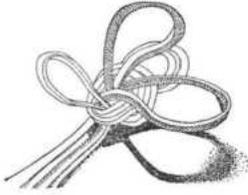
ただ一つ確言できることは、われわれがああ国民とああ社会とを、決して視界から遠ざけてはならず、ましてや蔑視することなど言語道断だという一事である。彼らがわれわれに先きだって経過しつつある(のかもしれない)今日の苦悩は、いずれわれわれをも待ち受けている公算が大きいからである。

さいごは西独だった。ブランド前首相に、それも百分近く会えたのは大感激だった。人間に対し大感情を發しうるのは、われながら数少ない美德(!)の一つだと、かねてうぬぼれている私だが、ブランド氏はその懐の深さ——彼の社民党はどこぞの「革新」政党とちがひ、決して気狂いじみた反共ではなく、マルキストをも包容する点、伊共産党と別の極で類似している——の故に、またその出自のロマン——雑役婦を母とした私生児で、ヒトラーに抗し戦争中はノルウェー国籍で反ナチ運動に従った——の故にも、周恩来氏亡きあと、私よりもっとも面晤の折を望んでいたリーダーだった。アウシュヴィツのユダヤ人犠牲者の記念碑の前で、声をはなつて号泣したという逸事も、多量な感情家としての彼を語るものとして、私には好もしかった。

はたせるかな、人間としてのぶの厚い、魅力的な存在と観じられた。西郷という人物は、こういうタイプだったのでは、と思わされるのだった。(国際商科大学教授)

INTENSIVE ENGLISH COURSES

— The IIST Experience —



Douglas W. Overton

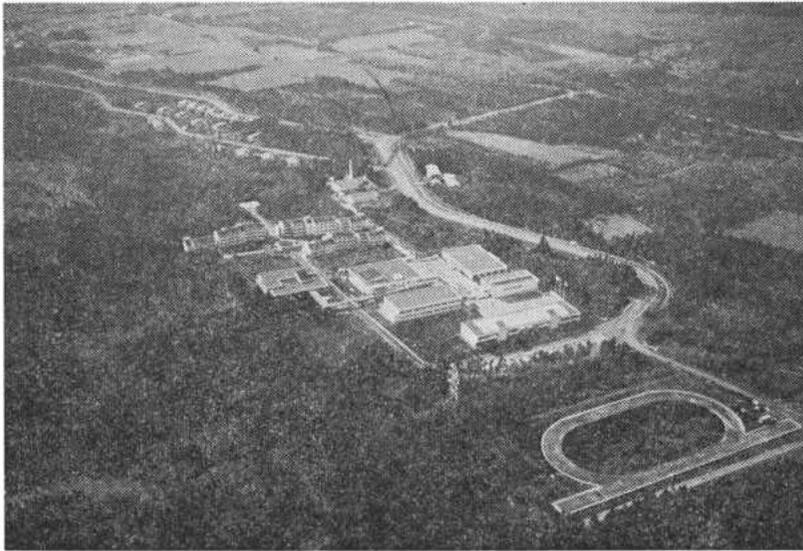
Japan's latest major effort to overcome the English language barrier has been the Institute for International Studies and Training at Fujinomiya, where a combination of substantial government and private funds has brought into being a full-blown campus located on a 180-acre tract of land in the shadow of Mt. Fuji. The campus embraces not only classrooms, lecture halls, a library, a language laboratory, and a dining facility, but also a complete dormitory system, faculty housing, and recreational areas. In short, what the founders set out to accomplish when the Institute was opened in 1969 was the creation of a completely self-sufficient center where English and international studies could be taught without any outside interruption—a situation of total immersion. In fact, at the time the Institute was sometimes referred to as an "America Mura", where all courses would be given in English and where indeed the official campus language would be English.

The Institute does not grant degrees, nor does it have any connection with the Japanese Ministry of Education. Under the terms of its charter it is placed under the aegis of the Ministry of International Trade and Industry, with the mission of providing advanced training to selected young Japanese businessmen and officials who have been marked for careers in the international field. The average age of the trainees at the Institute is 28; virtually all are graduates of well-known Japanese universities; and most are already five years into career. Half

of the student body is married, but their families must be left behind when they are assigned to Fujinomiya.

IIST operates a number of short-term courses during the year (of which English study is always an important component), but its major concern has been its one-year course, which begins in September and runs through to the following August. This course is divided into five major components, beginning with two months of intensive English training, and followed by area studies, international management and economics, a second foreign language (with a choice of French, Spanish, German, Chinese, or Russian), and finally a one-month trip abroad for overseas study. The English course always comes first in point of time, since on this must depend some of the succeeding courses that use visiting professors from abroad who lecture in English.

The intensive English curriculum followed at IIST does not differ substantially from that in other institutions where English is taught as a second language. Most of our emphasis is placed on listening comprehension and speaking, less on formal reading and writing *per se*. Where the Institute differs from most other institutions in Japan is in its ambiance and in its isolation from ordinary Japanese life. Thus, a trainee at the Institute can expect, at least during the intensive period, to be surrounded by English. Not only will he undergo six hours a day of formal classroom training, but he can also expect to put in three hours of home-



Institute for International Studies and Training

work every evening. He will also during this period meet a number of foreign visitors to the campus and have an opportunity to see foreign films.

The average student at the Institute can expect his day to include 25 minutes of pronunciation drill, 25 minutes of monitored language laboratory study, 50 minutes of dialogue practice, 50 minutes of structure study, 50 minutes of aural comprehension work, and 50 minutes of a reading-writing workshop aimed at developing vocabulary. In the evening he will join in a one-hour "vitalization" session in his dormitory, a free and unstructured English discussion period which we now usually refer to as a "dorm session".

The foregoing curriculum is our standard one, though it does not necessarily apply to all of our trainees. Men enter the school from varied backgrounds and with a wide range of English proficiencies, and for some years now it has been our practice to divide them into three "tracks" using different texts. The middle track has been described above. Track I, usually comprising the top ten percent of the incoming class, con-

centrates largely on the BBC/OUP Bellcrest series of films and textbooks. On the other hand, Track III (the lowest third of the school) gets a strong dose of basic structure and vocabulary, usually taught by a Japanese instructor.

As for the professional faculty, they are drawn at present from the United States and the United Kingdom, though we are by no means adverse to accepting teachers from other Commonwealth countries. The faculty-student ratio we

seek to maintain in most classes is one to seven. However, in certain instances (for instance, in aural comprehension and other listening classes) we have found 14-man classes to be workable.

One unique feature of the program is the use of "teaching associates", younger native speakers who are brought to the campus to assist in the English classes and to participate in campus and dormitory life. Our present associates come from the United States and Canada, but in the past we have had men from England, Ireland, and even Switzerland and Norway. All, however, could be termed "native speakers" of English. The teaching associates range in age from 23 to 30, all hold at least a Bachelor's degree, and several are MBAs. Few have ever been in Japan before, and none could be called a professional teacher—as a matter of fact all are aiming at careers in business and government, as are our Japanese trainees.

The teaching associates have been particularly useful in the dorm sessions, where free conversation and give-and-take are in order. They also help with some of the

formal classes, particularly those in aural comprehension and (under the close supervision of the professional staff) in the reading-writing workshops. We do not attempt to use teaching associates in the pronunciation, dialogue, or structure classes—experience has proven that this is beyond their depth.

From the beginning the selection of appropriate teaching materials has presented us with a challenge, for the simple reason that the ready-made English courses one finds on book-sellers' shelves do not seem to be relevant to our situation. We have no linguistic complaints about these texts; our difficulty with them arises from their subject matter, which fails to appeal to 28-year old business executives.

Consequently, soon after the Institute was opened eight years ago, we decided that our only recourse would be to write our own textbooks for the English program. For this we turned to our consultant at the time, Professor Ted Plaister of the University of Hawaii, who produced for us a pronunciation drill book, a book of "auding practice" (contractions and coalescences), and a book of dialogues likely to occur in international situations. These texts have since undergone some revision and amplification, but they are still standard fare at IIST. To them we have gradually added some supplementary materials, including texts on campus dialogues, public speaking, Western etiquette, useful business vocabulary, readings in area studies and business, and a series of taped "mini-lectures" in the same fields.

It would be misleading to imply that we depend solely on our own home-made materials. Actually, we do use with good effect such commercially available materials as the Bellcrest series mentioned above, the Lado series, and Joan Morley's excellent workbook on *Improving Aural Comprehension*.

sion.

The eight-week intensive English course finally comes to an end in mid-November, at which time the 100 or so participants are given a TOEFL. Hopefully, all will attain a score of at least 500, the minimum goal we consider acceptable for the ensuing academic courses under visiting professors from abroad and for the overseas training program. Actually, this is a pious hope! Only about one half of the student body can attain a 500 on the first try. For the rest further study is in order.

The post-intensive study we prescribe differs from that of the eight-week intensive period in that it places considerably more responsibility on the trainee himself and less on the instructors. As a matter of fact, it is almost entirely a self-study program (except in the case of the very lowest students), though it is carefully supervised by counselors. Individuals who are weak in reading are assigned to the Reading Laboratory, where they may choose the materials they want to study. Many select the SRA reading cards, but we also maintain a file of IIST Readings (with comprehension questions) based on the area studies and business courses taught at the Institute. We also stock the easier novels, short stories, and detective stories, as well as the *Readers Digest*.

Individuals who have listening comprehension problems are sent to the LL, where brief taped talks are provided together with comprehension questions that must be answered and turned in to the counselor. Another LL device, the Respolyzer, is also brought into play. This enormously complicated (and expensive) gadget is in effect a small computer. A passage is read live or played on tape, questions are posed, and trainees are given a choice of answers. The computer then scores the test and delivers a print-out that can be posted for everyone

Not only has the presence of these nine

Like all traditional classroom teachers, I am no great enthusiast for learning machines, and I have done nothing for my popularity with the IIST administration by observing that while it is indeed true that the Respolyzer can replace three teachers in classrooms, it is equally true that it can tie up three teachers in the control room figuring out how to operate the thing. Be that as it may, the Respolyzer offers a change of pace from classroom routine, and the trainees themselves seem to be enthusiastic about it. Perhaps their judgment is more to the point than mine.

In early February we usually administer another TOEFL to the lower half of the school, and this time most of them break the 500 barrier. For the few who remain there will be more self-study and hopefully a break on the oral interview that every IIST trainee must undergo with a committee of "outsiders" before he can graduate.

It is now eight years since the Institute started operations, and perhaps an evaluation is in order. To begin with, IIST has never become a real "America Mura", for the simple reason that the native speakers of English on campus—faculty, teaching associates, and some foreign students—are outnumbered ten to one by the Japanese side. This doesn't disturb us so long as our teaching remains effective, and I believe it does.

As for the teaching materials we have found or developed on our own, we are generally satisfied, though we are not happy about our writing textbooks, in particular those used for business letter writing. Our problem here is that we have never been able to find or develop a book that satisfies the needs of *all* the trainees.—they come from too many different backgrounds.

The teaching associate program has, in my opinion, been an outstanding success.

to see.

young foreigners during the autumn months helped the campus as a whole; it has contributed substantially to lessening the burden on the regular faculty. At the same time, it has permitted us to halve the size of the classes we originally taught and to improve the quality of homework. This is not to say that teaching associates should teach all the subjects in our intensive English curriculum. The associate program is one that I would commend to other schools in Japan. It can take fifty percent of the load off the back of a regular instructor and it is surprisingly economical to operate.

In my opinion, our biggest problem at IIST stems from our initial selection process. The Institute has never conducted entrance examinations, preferring to let the various sponsoring agencies (there are now some 90) select the men they want to send to us for training. We do, of course, administer a placement test to new arrivals, usually the CELT. One has only to look at the CELT results for an incoming class, often ranging from 260 all the way down to 50, to appreciate the faculty's problem in bringing everybody up to the TOEFL 500 level in eight brief weeks. That even half of the school can make it by mid-November is something of a surprise; that the other half can make it, or nearly make it, by February is something of a miracle.

The fact is, an intensive program of the type we operate for the eight-week period is only successful for trainees who have already achieved a CELT score of 160 at the very least. For those below that level I would question whether they ought to come to IIST at all. Our standard curriculum and methodology simply will not work out very well for them.

One final point: intensive English programs must lead directly to real-life situa-

(Continued to p. 26)

Oral Approach に関する実態調査

—アンケートの集計と考察 (II)—



ELEC 教材・教授法研究グループ

伊藤 健三 下村 勇三郎
渡辺 益好 伊藤 元雄

本誌の前号 (No. 57) で紹介した OA についてのアンケート I は、主として OA の理論面についての理解度を調査したものであった。今回は、前号に引きつづいて、アンケート II および III についての集計結果、および考察を発表する。

アンケート II

アンケート II の内容は、OA による指導法、主として指導技術について教育実践の場でどのような意見分布があるかを調査しようとしたもので、その設問と集計結果は次の通りである。

II. 次の設問に対して、あなたのお考えをおきかせください。該当する選択肢の記号を○でかこんで示してください。なお、一部ご意見を記入していただくものもあります。

- OA による指導法が他の指導法にくらべて、比較的効果的だと思いますか。
イ. 思う 81.4%
ロ. 思わない 10.6%
- Mim-mem は指導上必要だと思いますか。
イ. 絶対に必要 55.6%
ロ. おおむね必要 38.3%
ハ. 必要ない 0.6%
- Pattern practice は指導上必要だと思いますか。
イ. 絶対に必要 45.6%
ロ. おおむね必要 49.2%
ハ. 必要ない 1.4%
- Pattern practice は1時間の指導手順の中で、次のどの部分で行なっていますか。(選択は、一つにかぎらない)

- イ. 前時の review で 51.7%
ロ. 新出 pattern の導入のすぐあとで 56.9%
ハ. その時間の consolidation で 15.6%
- 1時間の指導を50分として、pattern practice に割りあてている時間はだいたい次のどれですか。
イ. 5分 18.1%
ロ. 10分 55.8%
ハ. 15分 18.9%
- Pattern practice はどのような speed で行なうことが必要でしょうか。
イ. Natural speed よりも速く 1.7%
ロ. Natural speed で 53.3%
ハ. Natural speed をやや slow down してもよい 36.9%
- Pattern practice において、日本語の cue を与えることについてどう考えていますか。
イ. 与えてはいけない 9.2%
ロ. 与えてもよい 77.8%
ハ. 与えたほうがよい 8.3%
- Pattern practice において、具体的場面の設定 (wall picture, picture card, 教室の事物などによる) が必要でしょうか。2つの段階に分けてお答えください。
A. はじめの段階 (imitation, repetition) では
イ. 絶対に必要 51.1%
ロ. 必ずしも必要ではない 40.8%
ハ. 必要ではない 2.8%
B. あとの段階 (variation, selection) では
ニ. 絶対に必要 20.3%
ホ. 必ずしも必要ではない 66.4%

- へ. 必要ではない 7.2%
9. Pattern practice において、生徒はつねに文の意味を理解して文を口にしていていると思いますか。2つの段階に分けてお答えください。
- A. はじめの段階 (imitation, repetition) では
- イ. たいてい理解している 36.6%
 - ロ. ある程度理解している 57.8%
 - ハ. ほとんど理解していない 7.5%
- B. あとの段階 (variation, selection) では
- ニ. たいてい理解している 56.9%
 - ホ. ある程度理解している 33.1%
 - ヘ. ほとんど理解していない 2.5%
10. OA は高校でも適用できる理論と思いますか。
- イ. 思う 74.4%
 - ロ. 思わない 17.8%
11. OA による指導で高校入試に対して心配はありますか。
- イ. 心配あり 43.9%
 - ロ. 心配なし 48.6%
12. Mim-mem と pattern practice だけで外国語の運用能力はかなり養成できると思いますか。
- イ. 十分と思う 5.6%
 - ロ. 必要だがこれだけでは十分でない 89.7%
 - ハ. 運用能力の養成の妨げになる 0.8%
13. OA による指導では「言語活動」をやる時間的余裕がありますか。
- イ. ある 21.9%
 - ロ. 少しある 54.2%
 - ハ. ない 15.6%
14. 学習の初期の段階で発音だけでは少なくとも native speaker なみになることを目ざして訓練する必要がありますか。
- イ. 必要あり 56.7%
 - ロ. 必要なし 40.0%
15. 学習の初期から、多少 broken でも、いろいろな言い方をたくさん記憶させることに重点を置き、「正確さ」は二義的に考えてよいと思いますか。
- イ. 思う 32.2%
 - ロ. 思わない 62.5%

中心となる mim-mem と pattern practice について集計結果から考察を試みたい。

1. Mim-mem の必要性

OA による指導法が他の指導法と比べて、効果的だとしているものが81.4%もいる。

これは、OA そのものに、いろいろ問題があるにせよ、一応、実践の結果の反応といえよう。

その中で mim-mem が指導上必要だとするもの、「絶対に」と「おおむね」をあわせて96%もいる。そして、必要とする理由は、「絶対に」も「おおむね」もほぼ共通していて、中高での大きなちがいはない。

主なものは次のようである。

- 発音・音調・リズムを正しく再生させる訓練であるため。
- 語学の学習はまず真似ることから。
- 自分のものにするのにもっともよい方法。
- 音として文を暗記させるために必要。
- Production に通じる第1段階。
- 言語習得は反復にある。
- とくに初期では口を動かしておく必要がある。
- 語いや文型の聴覚心像の定着のために。
- 言語の習慣形成のために。

また、「絶対に」とはいえないが、「おおむね」としたもののなかで目立った理由のいくつかを中高に分けてみると次のようである。

<中学>

- 原則として必要だが、人間の類推力を無視した、かたくなな考えはだめ。
- 上級になったら double, triple など細かく分けてやる必要なし。
- 「Chorus」で出来たと思えても、個人的には未完成の場合もあるから。
- 授業にバラエティーをもたせる意味で必要と思う程度。

<高校>

- 初期の段階では大いに効果的と思うが、高校ではどうも。
- 制約された時間内で一定の教材をこなすためには、mim-mem が省略されてもよいと思う。しかし、絶無ではいけない。とくに高校上級学年では。
- 言語活動はやはり心的活動と関連があるから mim-mem 一本だというわけにはいかない。

A. Mim-Mem と Pattern Practice について

ここでは、主としてOAの提唱する指導技術のうち、

なかには、「Text によっては文の数の多いものがあり、1時間内で 10 sentences 以上は無理」などと述べたものもある。これなど、mim-mem を recitation と混同した誤解から生じたものと思われる。

さて、mim-mem を「必要なし」としたものも皆無ではなかった。1～2 の理田は次のようであった。

- Communicative competence を重視したい。
- 英語の form を教えるのが授業の主目的でなく、英語という言語そのものを教える必要がある。

2. Pattern practice の必要性和問題点

(1) Pattern practice を必要とする理由

Pattern practice を指導上必要とするものが、「絶対に必要」と「おおむね必要」とあわせて約95%いる。このうち「おおむね必要」としたものは、49.2%もいる。このことは指導上の必要性は認めても、絶対的とはいえないきれいな何らかの問題のあることを示しているといえよう。

まず、「絶対に必要」としたものの主な理由はアンケートからまとめてみると次のようである。

- 言語習慣を体得するために。
- 文型や文法の説明だけでは、理解、定着には不十分。
- 運用力の基礎として。
- Communication あるいは p-p dialog に到る前段階の学習活動として不可欠。

上記の理由の内容は、中高とも同じようなものであるが、中に、次の高校側の理由は、いかにも、ふだんの指導の実感があらわれているように思える。

- Pattern practice をやらないと読み書きに偏してしまふ。
- それなしでは、生徒は訳した日本語を記憶することだけしかやらない。
- 外国語と日本語の構造のちがいを覚えるのは、説明を聞くことではなく、口に出して練習することによってのみなされる。

(2) Pattern practice の問題点

次は、pattern practice の必要は認めるが、「絶対に」とはいえないという人の理由である。主なものを、中学・高校に分けて列挙してみよう。

<中学>

- 意味を理解せずに p. p. をすることには疑問を感じる。

- あまりにも無味乾燥になるような気がしてそんなに熱中することがなくなりました。
- 形式にこだわらず幅をもってやってよいと考えている。
- 欠点は生徒が自分が発言している文の意味を考えずに発言することである。
- 文法事項についての理解をもたせるために説明や整理をとときどきやるべきだ。
- 45分授業で可能な範囲に限るべきだ。
- 人間には類推力や想像力があるので、あまり親切しすぎてもダメ。
- 指導時間の関係から省略することもある。

<高校>

- I'm in trouble. You're in trouble. He's in trouble. までは可。しかし She's in trouble. になると……。
- 教師のあたえる文の範囲内で生徒が出来ても、本当に生徒の力となったとはいいがたい。自己表現に結びつかねばならない。
- 「絶対」としないのは、入門期を除くと学年の進むにつれて、学習者の心理的な面からその単調さが敬遠されがちである。
- IQ の高い生徒と、低い生徒が同じ調子で練習したとき、上位の生徒が興味を失って行くきらいがある。
- 高校の reading materials は文語的なものが多いので、p. p. には不向きなものが多い。時間不足も大きな原因。

以上の「絶対に必要」とはいえない人の理由を、問題点としてまとめてみると、次のようになろう。

- A) 1時間の大半が単調な口頭練習に終始する。その結果、生徒の知的欲求を満たしてくれない。このことが、しばしば、OA そのものに対する批判ともなっている。
- B) Pattern practice は、学習活動の域を出ていない。つまり、場面設定が十分でないため、言語活動面から考えた場合、限界がある。
- C) 十分に意味を理解せず、pattern practice を行なっていることに疑問を感じる。

上記のB)の問題点は、アンケートの設問8にも関係している。

Pattern practice において具体的場面の設定は、はじめの段階では「絶対に必要」が過半数を越しているが、あとの段階、つまり、variation, selection では、「必ずしも必要ではない」が66.4%もいる。このことは、imitation, repetition の段階では、具体的な場面設定が

しやすいが、variation, selection になると、situation が変わる場合が多く、具体的な場面設定がしにくいということであろう。

C) の問題点は、アンケートの設問9にも関係してくる。

Pattern practice において、はじめの段階では、口にしている文の意味を「ある程度理解している」が57.8%である。逆にあとの段階では、「たいてい理解している」が56.9%となっている。

このことは、十分に意味を理解しないで、imitation, repetition を行なっているものがかなりいるということになる。むしろ、一般的には、はじめの段階で、文の意味をよく理解して、variation, selection の段階では cue による manipulation が主になるので、意味の理解が不十分になりがちと考えられるのだが…。

もっとも、設問の、「文の意味」を「文の構造上の意味」ととれば、上記のデータは、一応理解できる。

つぎに、pattern practice を「必要でない」としたひとが若干いた。その人たちの理由とするところは次のようである。

- Pattern practice は、manipulation ともいえる。これは、有用であるが、目標は communication であるから。
- 英語の形式を教えるのが授業の主目的ではなく、英語という言語そのものを教えるのが主目的であるから。
- Pattern practice をやっていると、生徒は疑問文は肯定文がなければ存在しないと考える成長した。これは欠点である。一番大切なのは、生徒が発話せざるを得ない situation をつくってやることである。

上の3つの中で、とくに3番目については pattern practice を実施する上で考えなければならないことであろう。肯定平叙文が最初にあって、つづいて否定文とか疑問文、あるいは、能動態を基本として受動態が続くというやり方だけでは、十分とはいえないであろう。疑問文だけの pattern practice も当然考えられるわけで、pattern practice 自体のあり方に、一工夫がなされるべきところである。

3. OA と言語活動

アンケートの設問13では、「言語活動」を行なう時間の余裕を尋ねている。

「少しある」がもっとも多く、54.2%となっている。

このことは、実際には指導内容が多く、そのわりには時間数が少ないということと大きな関係がある。

ただ、「言語活動」をどのように考えるかということも問題である。たとえば、OA による指導で、pattern practice で行なう selection が言語活動に入るか入らないかということも問題となろう。

いずれにしても、mim-mem を含む pattern practice と、言語活動との関係を今後の課題として、明確にすることも必要であろう。この点についてはあとで別にとり上げてみたい。

アンケート III

アンケートⅢは、OA が教育実践の場でどのようにとり入れられているかについての実態を調査し、最後に、OA に限らず、日本の英語教育の現場が直面している種種の問題を明らかにしようとした。I, II とちがいで、主として記述方式で回答を求めたので、回答の結果は概略的にその傾向を報告しながら、同時に考察を加えてゆくことにする。

A. OA はどのように指導に、とり入れられているか

1. OA 指導の現場での実態

「OA を指導にとり入れている」という場合、原理的な面を正しく理解し、かつそこに伴う指導技術を駆使しているというのが本来の姿であろう。しかしアンケートの回答を子細に見ると、原理面の理解が不十分のまま、指導技術のみをとり入れたり、両者を混同しているのではないかと思われるものもかなり見受けられる。

それぞれに質的な相違はあるにしても、OA をとり入れた指導をしているかどうかについては回答は次の通りである。

A. とり入れている	50.6%
B. とり入れたがいまはやめている	27.8%
C. はじめからとり入れていない	17.2%

中学・高校別の内訳は、中学校では A—67.6%, B—22.4%, C—10.6%, 無解答その他—3.9%であり、高校では A—32.1%, B—35.8%, C—5.5%, その他 26.6%である。

2. とり入れられている指導技術

「主として何をとり入れていますか」という問いに対

しては、その回答として指導技術面が表に出てくるのは当然のことであろう。なかには、ELEC が提唱している 1 時間の指導過程を、ほとんどそのまま取り入れているというものも、中学・高校ともにあったが、その数は当然のことながら中学の方が多い。

回答の大多数は、OA の特徴的指導技術に関するものであり、defining sentences による oral presentation (oral introduction), mim-mem, pattern practice, p-p dialog, また contrast を利用した導入および練習などを実践にとり入れようとし、またとり入れていると述べている。

なかでも回答数の多かったものは pattern practice が中学・高校ともに第 1 位を占め、ついで mim-mem, oral introduction の順になっている。その他の指導技術も多種多様にわたるが、以上あげた 3 つに比較して回答数は大幅に減少している。

3. OA を実践にとり入れることを阻害している主な理由

(1) 外的要因

OA の指導技術をとり入れることが、学習指導上有効であると認めながら、それを実践で十分に活用できない理由としていろいろ述べられている。その中でもっとも多くのは、「進捗の問題」である。つまり、教科書の教材を所定の時間内でこなせなくなってしまうというやみである。指導時間数が限定されているために、各種の口頭作業を教師がある程度納得するまでやれば、進捗が心配になる。文型練習だけではなく communication practice もやらなければならないので pattern practice に十分時間をかけることができないというのである。指導時間の問題は今後ますます深刻になってゆくであろうが、現実には、限られた時間でできることは何か、何をするのが学習上もっとも有効かということを変更して考えなければならない。その上で OA の提唱している oral work をその中で位置づけてゆくことが必要であろう。

第 2 番目に多かった理由としては、中学では「生徒の実態 (能力差・学力のひらき)」の問題であり、高校では OA でやってゆくには「教材がむずかしすぎる」という問題である。これも生徒の実態と相対的に関わるわけであるが、高校で「生徒の実態 (低い能力)」を理由に上げたひとの数は第 4 番目にランクされている。レベルの低い生徒に有効であったという回答もあり、また、生徒の能力差のために、口頭作業についてゆけない生徒が出てくるのでやめたと述べているものもある。これはど

う考えたらよいであろう。能力差を問題にする場合、OA による口頭作業でなくてどのような指導過程をとればそのような点が解消できるのか、これは明らかではない。OA が提唱する mim-mem, pattern practice といった口頭練習の方式そのものに原因があるとは考えられないので、時間不足やその他の外的条件によるものである。

第 3 番目に多い理由としては、中学・高校ともに「入試 (受験) に対する心配」があげられている。高校入試・大学入試などの現実を考えると、reading や writing の指導、文法学習も必要なので、口頭作業に重点を置くことができないと考えている人もかなりいる。英語学習の第 1 段階の目標に関する問題で、われわれ研究グループの研究テーマの原点になるところでもあるので、ここではその点の指摘だけにとどめておく。

そのほか、「教科書が OA 向きにできていない」そのために、「教材準備に時間がかかる」のでつい OA から離れるようになったという人もいる。これまた、外的条件によるものであるが、OA に適した教科書とはどういう教科書なのか。そもそも、教科書・教材は学習指導上どのように位置づけられるべきものなのか。この問題は、まさに本研究グループの研究に直接問われることなので、これまたここでは問題点の指摘にとどめておく。

OA を取り入れることを阻んでいる外的な要因として、「教師自身の言語能力の不足」をあげているひともあり、音声面に自信がない、pattern practice が speedy に行えない、oral presentation がうまくゆかないという。教師自身の研修に関わる問題である。あとでも述べるが、教員が研修の機会をもっと持ちたいという希望は非常に強い。

(2) 内的要因

上記のような外的要因とは別に、いったんとり入れようとした OA を途中でやめた理由として、OA の指導技術と固有にかかわるとされる理由をあげているひともあり、Pattern practice は意味不在になりがちであり、あまりに機械的、かつ一方的な練習で、学習者の心的活動を活発にさせ、自発的活動を誘引することがない、生徒数が多いととくに p-p dialog は非常に非能率的になり、上級になるにしたがい機械的な mim-mem や pattern practice に生徒がついてこなくなる、などという点はその主なものである。これらの点は、周知のように、OA に批判的な立場からよく指摘されることである。OA が、これだけで、完全な外国語指導理論とはもちろん言えないが、これらの批判をどう受けとめるか

については、項を改めて詳述したい。

B. 日本の英語教育について

上記テーマについて、多数の誠意ある回答が寄せられた。どの意見も正確な現状分析と将来への展望に立って、改善すべき箇所、また積極的に推進すべき諸点が明確に述べられているが、ここでは、意見が集中した項目を紹介するにとどめる。

1. 日本の英語教育の目標の明確化。
2. 英語教育の条件、環境の整備。
 - (1) 受験教育に害されて、聞き、話す面での指導が不十分である。
 - (2) 教師の担当時間数が多すぎる。
 - (3) クラスサイズが大きすぎ、徹底した指導ができない。
 - (4) 教師の自己研修と再教育が不可欠であり、その公的措置が望まれる。
3. 基本的事項を徹底させる教材の精選と言語活動に適した教科書の研究開発。
4. 習慣形成と認知学習両理論の長所を採り入れた教材、教授法の研究。
5. 現場教師自らの手による日本人に適した教授法の開発。

以上の外、中学校については、⁽¹⁾学習指導要領の拘束、⁽²⁾能力差、⁽³⁾教科書の広域採択制批判、⁽⁴⁾言語活動の場の欠如、⁽⁵⁾必修語い数の不足、⁽⁶⁾知的要素の欠けた教科書、⁽⁷⁾日本語からの approach による指導法、⁽⁸⁾中高の一貫性、⁽⁹⁾授業時数の絶対不足、があり、中でも授業時数週3時間については最悪の条件としている。

高校では、⁽¹⁾選択教科としての趣旨の徹底、⁽²⁾英語教育改善のアピール、⁽³⁾表現力養成を中心とする易しい教科書の開発、⁽⁴⁾Communication に重点を置く指導法の研究、⁽⁵⁾格調高い文を教材とする読解力の養成、⁽⁶⁾大学入試による高校英語の歪み、などが述べられている。

今回のアンケートにみられるものは、1975年11月の日本英語教育改善懇談会 アピールの内容とほぼ同じであり、その骨子となる項目を生々の声で実証したものとえよう。

ま と め

—OA に対する批判と今後の課題—

わが国の英語教育に OA が紹介されてすでに4半世紀になるが、OA の考え方は十分とは言えないが、かなり

指導実践の場に浸透し、OA をよく理解しているところではその特徴が高く評価されてきていることが、今回のアンケート調査によって改めて確認されたように思う。

しかし、いっぽう、OA による指導の経験から OA についていろいろ実践上の問題点が指摘されていることはすでに紹介したとおりである。また、最近では理論面からも OA に対し批判が活発に加えられており、今回のアンケート調査でもうかがえるのであるが、そのために、教育現場の一部に、OA の考え方は基本的に誤っているのではないかという不安感があるように思われる。

本研究グループは、今回の調査結果に提起された OA による指導に関する問題点ないし批判を巡ってグループ内で数回にわたって討議、検討を行ってきた。以下、現在までの討議、検討の結果をごく概括的にまとめておく。

1. OA の特徴

(1) 第1段階の学習目標

OA の基本的な考え方は、英語学習の究極の技能上の目標が何であれ、学習の第1段階における目標は、限られた内容語の範囲内で基礎的な文法構造と発音に口頭習熟 (oral mastery) させることであるとする点にある。この目標は、基本的には、わが国の学校教育における英語学習の第1段階での目標であると言えよう。将来、生徒がどのような生活面で英語を必要とするにしても、その基礎になる能力を養うには、第1段階の学習でこのような目標への到達をめざすことこそもっとも能率的な、有効な学習であると考えられる。なお、これに関連して聴解力と読解力の相関関係を調査して、確かめておく必要があると思っている。

(2) 教材編成・指導技術面の特徴

そして、OA の特徴は、上記の目標に到達するために有効とされる教材編成と指導技術の面に具体的にみられるのである。それは、(1) 教材の言語材料の選定・配列のさいの 'successive small steps of contrastive patterns' という考え方と、(2) 'pattern practice' に代表される口頭練習の技術の2つに要約されよう。

これらはいずれも、上述の英語学習の第1段階の目標に到達するためにおおいに資するものであると言えよう。この点に関する OA に対する評価は、その理論的根拠をなしているアメリカ構造言語学の言語理論や、行動心理学の学習理論が、それぞれ言語理論、言語習得理論として古くなったと言われる現在でも変わるものではない。特に、pattern practice により、それまでは、とかく行なわれにくかった口頭練習が活発になり、とにかく教室で生徒が英語を口に発するという練習の量が格

段と多くなり、発音指導に効果をあげてきていることは何びとも否定できない事実である。また、新出の文型や文法事項を理解させるのに、既習項目との対比を利用することがしばしば有効であることも広く一般に認められている。

アンケートⅢの4の回答に述べられていたOAに対する評価の内容は、概括的に言えば、外国語習得の原理または理論に関するものはほとんどなく、指導技術面に集中しているが、OAを是とするものの中では、上記の2つの特徴に関して大変効果的であると回答したひとが、とくに中学に多かった。「効果的で学年が進んでも興味や学力が持続できる」(中)、「英語運用の意気込み、学習意欲が高い(授業に活気があり楽しい)」(高)、「Targetを意識させ、目的意識を持って学習できる」(高)、「記憶の定着がよい」(高)など、非常に積極的である。

しかし、是としたひとの中でも条件づきのもの、たとえば「徹底的にやれば効果的(途中で教師がなげる)」(高)、「最高の指導法、しかし教師の力がないと継続できない」(中)、「音声面に効果的」(中・高)、「効果的ではあるがalmightyではない」(中)など、OAは必要であり重要ではあるが、それだけで十分であるとは考えていないとするものがかなり見受けられる。これらのなかで、OAの提唱する指導技術は、目標到達のための有効な必要条件ではあるが、それだけで十分条件にはならないという指摘は重要である。

2. OAに対する実践面での批判

OAに対する実践面での批判のなかには、OAについての理解不足、ないしは誤解によると思われるものもあり、それらについては主としてアンケートⅠに関して前号で言及しておいた。アンケートⅢの4の回答で、OAを否とするものの中で、指導技術、とくにpattern practice, mim-memを批判の対象にしたものが目立っている。そこで、以下、OAの特徴の一つである「型を中心にした指導」に対する批判をどう受けとめてゆくべきかについて述べてみたい。

(1) Pattern practiceは無味乾燥

Pattern practice, mim-memに対する批判の多くは、生徒の学習心理、興味という観点からのものである。たしかにmim-memや、pattern practiceは機械的なdrillであり、無味乾燥で、生徒にも、また教師にも、疲労を感じさせやすい側面は持っている。しかし、それらが単調でつまらなく意味のないものになるか、積極的な意欲に満ちた活気のある学習活動になるかは、その扱い

方に大きく左右されよう。英語の学習から、これらの学習活動を除いてしまったら、どうやって「言語活動」へ到達するのであろう。また、OAによる学習作業はmim-memやpattern practiceのみから成っているのではない。OAを全体的・総合的に把握し、部分がどのように全体を構成しているか、どのように段階的に目標に到達してゆくのかを認識する必要がある。各段階における学習作業の当面のねらいと英語学習の究極の目標とは必ずしも一致しないのである。

どういう目標を設定するかによって、それを達成すべき方法は規定され、方法によっては効果的にも非能率的にもなり得る。つまり、ある一つの方法の長所は、ねらいが変われば短所にもなってしまうのである。したがって、どういう目標が前提となっているかを明確にしておかないとそれを達成するための方法について、妥当な評価はできない。以上のことを十二分に踏まえて、OAの指導理論を総合的に正しく究め、正しい理解の上に長所は長所とし、短所は短所と率直に認め、是正してゆく柔軟な態度が必要であろうと思う。指導法の理論は、あくまでも一般論であって、これを実践面に効果的に具現してゆくためには、教師ひとりひとりの主体的な判断力が要求される。いかなる指導法をとるにしても、その指導理論を自ら検討・確認し、それを正しく実践し、生徒の実態や自分の能力を考慮しつつ、借りものではない本当に自分としての結論を出すことが重要である。

OAの指導理論は多くの人が考えている程かたくるしいものではない。このことはFries, *On the Oral Approach* (1958)にも単的に述べられている。学習のステップは一定不変のものでもないし、融通性のないものでもない。もっと柔軟な姿勢で目標への道すじを求めてゆく必要がある。これまでOAの理論に基づく一つの方法が強調され過ぎたきらいがあることは事実だが、今後、英語教育の目標、教材、指導法をOAの原点に立ち戻って再検討してゆくことが肝要である。

(2) Patternの指導と「言語活動」

「型を中心にした指導」についてすでに述べたように、「授業の主目的は英語の形式を教えるのではない」、「目標はcommunicationであるのに、pattern practiceはmanipulationにすぎない」といった批判がある。これは、教材で言語材料面が偏重され、指導形態が、とくに口頭練習が型中心になりすぎてきているという批判である。確かに、OAの普及に従い、学習指導の形態が「文法志向型」に傾いてきていることは否定できない。そして、構造型の学習だけに終始したのでは、日本のような

学習環境においては、究極の技能目標である英語の運用能力を伸ばしてゆくということは期待できないのではないかという疑問が提起されている。何事にも行きすぎによる弊害というものはあるもので、OA もその普及とともにその特徴の英語教育改善への寄与が強調されすぎると、かえってその現実的価値がそこなわれるおそれがある。その意味で、型中心の指導に対する過大評価には注意しなければならない。確かに、型の練習で生徒は何を学ぶのかを問い直してみる必要がある。

上述の言語材料面の偏重に対する批判は、じつは、指導全般にかかわる基本的な問題の提起なのである。それは、我が国の中学・高校の英語学習において、「構造型志向」(structure-centered) の指導が有効か、「場面・文脈志向」(situation-centered) の指導が有効かということである。生々とした場面や文脈のある教材の中で構造型の学習も系統的に行なわれることが理想であるが、現実には、構造中心になれば“situation(context)random”になり、反対に場面・文脈中心になれば“structure random”にならざるを得ない。この2つの考え方を教材及び指導技術の面で、どの学習段階では、どちらにより多くの比重をかけて、どう統合するか。我々の英語学習指導に対する基本的な考え方の問題であると考えられる。

最近では、あとでも述べるように、とくに認知学習説の立場から、構造型の見かけだけの習得よりは、英語を運用する人間としての生徒の心的活動が活発にはたらくような学習が行なわれなければならないという面が強調されている。学習者の心的活動を活発にさせることが重要であることは言うまでもないことである。かと言って、「ミム・メモ」や「型の練習」のもつ重要な価値が否定されるわけではない。型の学習にはそれなりの限界はある。その限界を認め、かつ、それらには、とかく“blind mim-mem”, “mindless pattern practice”, “pattern practice *ad nauseam* (いやになるほどまでやられる)”になりやすいという落とし穴のあることを認めつつ、その価値が実現されるよう指導上配慮しなければならないということである。さらには、運用できる言語材料の範囲は限られているが、言語使用の実際の(またはそれに近い)場面や文脈の中での言語運用を練習させるといった指導形態が工夫されなければならない。柔道で言う「型の練習」に対する「乱取り練習」である。この意味で、昭和47年の改訂学習指導要領で指導内容の大きな柱として「言語活動」が掲げられていることは高く評価すべきである。この「言語活動」を1時間の指導過程の中にどう位置づけてどのように指導してゆくかが、周知のように、我々の当面の実践的課題である。

3. OA に対する理論面での批判

最近、認知心理学と変形文法理論の立場から、言語習得は本質的には“cognitive-code learning”であり、また、我々の言語行動は人間の心的活動で、それは一定の規則に従って行なわれる創造的活動であるという考え方が唱えられている。「創造的」というのは、例えば、聞いたり、読んだりしたことのない新しい文が理解できたり、使えたりするということである。そして、その言語行動は何かある体系をなしている規則に従って行なわれ、その規則というものは、文の構成及び解釈の過程に関する規則で、非常に複雑な規則である。そのような規則についての知識が形成されてはじめて、言語が習得されたというのである。

しかし、native speaker はそれがどのような規則なのか、またどう作用するかを普通は意識しているわけではない。その規則についての知識は native speaker にとっては、普通は意識にのぼらない「内在化された知識」なのである。そして、そのような知識が形成されなければ、言語を習得したとは言えず、また、この知識の形成は、人間の生得的な能力によってなしとげられるものであるというのである。つまり、このような考え方には、人間には生得的な言語能力が備わっているという前提があって、生活環境の中で接する具体的な発話が引き金になってその能力が動き、上述の規則が知識として形成されてゆくという。このような言語習得説は、言語習得を習慣形成学習とみるのに対し、認知学習とみるのである。そして、従来は、習慣形成説とそれに基づくとされている OA が支配的であったが、いまやそれを支えていた行動心理学の S-R 理論や構造主義言語学の言語理論としては古くなったとされている。

そこで、習慣形成説とそれに基づくとされている OA に対する批判が認知学習説の立場から活発に行なわれてきているのである。

たしかに、英語の学習を考えてみても、そこには習慣形成ということだけでは律しきれないものがあることは、すでに認められてきたところであるが、改めてわれわれは英語の学習指導の過程で生徒の心的活動を活発にさせることがいかに重要であるかを認識させられている。また、言語行動は人間の心的活動で、それは一定の規則に従った創造的活動であるということが変形文法理論ではっきりと理論づけられ、英語学習では英語の規則についての知識を形成することが——それだけで十分ではないが——必要であるということ、これまた改めて認識させられている。

(1) “Meaningful practice instead of drill”

最近, F. Twaddell と論争をしている K. C. Diller は, 認知学習説の立場から, “Rationalist linguistic theory calls for *meaningful practice* instead of drill.” と主張している. 彼の提唱する “meaningful practice” というのは, 我々がここ数年来取り組んできている「言語活動」とほぼ同じ練習と考えてよさそうである. 認知学習説という理論の立場からは, “meaningful practice instead of drill” となろうが, 実践経験からは, 我々は, 文脈や場面の中での言語の運用練習と, 習得すべき基本的な音素や構造型についての drill との両方に目を向けなければならないと言えよう. 認知学習説か習慣形成説かという二極的な考え方にとどまるかぎりには, 現在のところこの2つは折衷ないし統合できないものであろうが, J. B. Carroll も示唆しているように, 両者は “not mutually exclusive but rather complementary” なものと経験的に判断されるならば, 理論はともかく, 指導の実践ではとにかく統合すべく工夫することが大切であろう. この点が理論と実践との違いである. R. Wardhaugh の “It would be entirely foolish to throw these [*i. e.* mimicry, expansion, substitution, and transformation] overboard in order to sail the completely uncharted sea of creativity!” にしても, また, F. Twaddell の “……but it would also be foolish to try to perform Brahms without previous digital exercises.” にしても, これは “blind mim-mem,” “mindless pattern practice” に対する単なる弁護とは思えない. 両者とも期せずして “foolish” という言葉を用いていることは, 実践に基づく信念の披瀝であって, 興味深い.

(2) 文法規則に関する知識の形成

認知学習説によれば, 子ども(生徒)は, 言語使用の具体的な場面や文脈の中に置かれ, その中で試行錯誤を重ねながら手さぐりの未経験の文を解釈したり, 構成したりしてゆく. つまり問題解決学習的な心的活動が活発に行なわれ, そのため, 当然, 子ども(生徒)は誤りを犯すことがあるが, それを周囲の者(教師)が適切に矯正してゆく. このような理想的な環境の中で母国語(外国語)の複雑な規則に関する知識が自然に形成され, 母国語の習得(外国語の学習)は進んでゆくのであり, 外国語教育においてはそのような環境を人為的に「作りだすように努めるべきである」ということになる.

理論的にはそうなるわけであるが, そのことはとりもなおさず, 外国語学習, 特に学校教育での外国語学習の

学習効果が実際には何故なかなかあがらないのか, その原因の所在を明らかにしているとも言える.

わが国の学校教育での英語学習は教室という不自然な言語的環境の中で(しかも限られた時間内で)行なわれる学習なのである. それゆえ, 「豊かな言語的環境をつくりだすように努める」と言っても, あくまでも「人為的に」作りだすのであり, それも「教室の中で」ということであって, たとえ, 教育条件が改善されても, それは本質的に至難の業であると言えよう.

教室の中で人為的に作り出される言語的環境であるから, それは当然不自然なものにならざるをえないし, また, そのような環境で行なわれる言語の使用は実際の使用ではなく, あくまでも練習でしかない. しかし, 不自然ではあってもそのような言語的環境のなかで言語の使用の練習——これが「言語活動」であろう——をさせることが経験的に言って大切であることは上に述べたが, この「言語活動だけ」をやらせることによって, 「文法規則に関する知識」の形成が期待できるとは考えられない. その点は, 母国語習得のさいの言語の実際の使用の場合とは基本的にちがうと言えよう. すなわち, 母国語習得の場合とちがい, とくにわが国の学校教育での英語教育では, 主としていわゆる表層構造に関する規則については, その知識形成を「言語活動」(言語の使用の練習)をやらせることによってあとはすべて生徒自らの発見だけに任せておくわけにはいかない. 何らかの方法で教師がそれに意図的にかかわらなければならないことは否定できないことであろう.

この点に関し, OA では, 「型」にはめ込む指導が重視されて, 言語の創造的使用の基盤ともいべき文法規則に関する知識形成の面が無視されがちであるという批判がある. なるほど, pattern practice はある特定の構造型を集中的に練習する練習である. 基本文の導入からはじまって, 同じ構造型をふくむ文を次々に言わせてゆく. しかし, 同じ構造型の文を練習させてゆくうちに, 個々の文よりはむしろそれら一群の文に共通する構造型そのものが「自動的な言語習慣」になることを目指すのであって, 構造型に関する知識は類推によって習得されてゆくという考えに基づいているのである. OA の「型」中心の指導は, 音声面での習熟とともに, 構造型に関する規則が——その規則の記述の抽象度は学習段階で異なるが——学習者によって認知されなければその目的を達したことになるので, OA も, 究極的には文法規則(構造型についての規則)に関する知識形成を目指しているのである. 教材の選択・配列に ‘successive small steps of contrastive patterns’ という原則をとり, 導

入や練習において型の contrast を利用しているのも、構造型についての規則に関する知識形成に資するようにとの考えに発するものである。この点に関し、J. Ross, "Transformationalists and ESL Teachers Today" で、次のように述べている。

Good pattern practice does develop a feel for how the syntactic relationships are expressed and for what semi-universal features or distinctions of meaning are marked in a language. Well-devised practice develops this understanding at the functional level, not just at a level of verbalization or parroting without comprehension.—*English Teaching Forum* Vol. XI, No. 4. (1973)

OA が文法規則に関する知識形成を軽視しているとか、pattern practice はそのような知識形成に役立たないという批判は当たらないように思われる。

認知学習説の提唱する言語習得観は、言語学習の基本に関する面の指摘であることは言うまでもないが、言語運用の基盤となる規則とはどういう体系の規則なのか、さらに、その規則についての知識が学習者によってどのようにして形成されてゆくのか、これらについて客観的にはほとんど何も解明されていないのが現状である。前者については、わが国の英語教育では従来 5 文型・8 品詞の学習文法が行なわれてきている。よりよい体系の学習文法が記述されるまでは、伝統的学習文法によるほかない。変形文法は、認知学習説と関連があると言われていたが、従来の多くの文法が無視していた言語事実の基底にある規則性を明示しているので、教師にとってはそのままの形で貴重な背景知識になる。また、教育的配慮を加えれば、生徒に英語の構造をよりよく理解させるための説明に有効に利用できるものもある。しかし、それらの新知見を利用する場合には、現在のところでは、現行の学習文法の体系の中に部分的に取り入れて利用するというのが、その価値を現実的に生かす方法であろう。

しかし、構造言語学が言語理論として破産したとは言っても、英語学習においては、それが表層構造における対立であっても、音素や語の結合形式の対立を学ぶことの重要性は変わらない。むしろ、変形文法が、従来の文法に比べて、文の生成についてより正確な情報を提供してくれるからと言って、あの複雑な規則を生徒に教え込んだり、また変形規則を一定の順に操作させて文を生成する drill をすることが有効であるかどうか、学習段階にもよるが、かなり問題があると思う。

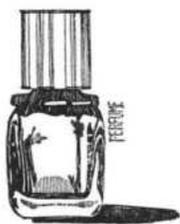
4. 結語

J.B. Carroll が、言語教育に関して、“No proved theory now exists to account for all the phenomena.” と言っているように、関連科学の発達は、言語教育という複雑な因子を含む人間の営みをじゅうぶん解明するところまで達していない。その意味で、専門家といわれる人はその学問の現時点までの到達点について、限界を明示する責任があろう。かつての構造主義言語学者たちの外国語教育に関する所説に対して、独善的であるという批判があるが、それはその所説の限界が明らかに示されていなかったためである。何か新しい理論が提唱されたとき指導の実践において注意すべきは、新しい理論の特徴にのみ目を奪われて、従来の理論が与えてくれていたものをすべて、なんの検討もせずに放棄してしまうということである。

そういう意味で、われわれ研究グループは、課せられた「日本の現実的教育環境に適した教材、教授法の研究開発」というテーマに取り組む第一歩として、従来から ELEC が唱道し、かなり普及してきていると思われる OA による英語学習指導の実際の成果を検討することからはじめたわけである。今回の OA に関する実態調査の結果は検討のための貴重な資料になったことに対して、回答者に改めてお礼を申しあげたい。

われわれは、ここにその概要を報告した検討の結果に基づいて、与えられたテーマについて探求してゆくわけであるが、そのさい、日々の指導実践を踏まえつつ、かつ日々発達してゆく関連科学が提供してくれる新知見を参考にして研究を進めたいと思っている。

現実のわが国の教育環境は、「日本の英語教育について」に要約されているような種々の問題をかかえているが、まず、英語教育において「何をやるべきか」を理念的に考え、つぎに、そのうちで何がやれるか、何はやれないか、そして、どのようにやるのが有効であるかを現実的に考えてゆくのが問題を整理してゆく一つの方法ではないかと思っている。これらのことを考えるさいに、教育の実践が、関連科学から新しい理論や知見が提唱されるたびに、それに振りまわされ、流行のように単なる目新しさを追い求めることのないように自ら戒めなければならないと考えている。また、いっぽう、現実的に考えるさいに、現実の困難を克服しようとする努力をせずに、はじめから安易に現実と妥協して、限界を設定してしまうことのないよう注意しなければならないとも思っている。われわれは教育は可能性の追求であると考えているものである。



高校段階の Pattern Practice

— 具体的方法のためのメモ —

OHASHI KIKUKO

大橋 菊子

Pattern Practice という手法は、限られた時間で一度に40人以上の生徒を相手に、必要な練習量を確保しようとする時、ずいぶん分力になってくれるのはたしかだ。ただし、この手法には野生の馬のようなところがあって、のりこなすのにいささか骨がおれる。ことに高校段階においてよけいにそうであるように思われる。しかし、骨がおれるからといって利用しないのは惜しいと思うので、数年の教室での経験から、のりこなすためのコツのようなものをまとめてみた。体でおぼえてきたことなので、理論的根拠にかけられるかもしれないが、そうしたものを断定的な口調で語るのをおゆるしいいただきたい。

Pattern Practice は万能ではない。が、今までにこれが難点で、といわれていることについて、私には必ずしも納得できないものがいくつかある。

中学生とちがって高校生は大人すぎて、とてもこんな単純な作業にはついて来ないだろう、と簡単にいってはいけないと思う。やりようによっては大人にならなくてできるのだから。後にのべるように上手にこちらのリズムに乗せてしまえば、けっこう楽しんでくれるし、高校生の場合は事前に作業のねらいとするところを話しておけばいいのだ。話せば理解してくれるし、場合によっては協力も得られる。

「教材の程度が高くて無理だ」ともよくいわれる。ただ難しいというだけなら、努力と工夫次第でこなせると思うし、お互その力量をほしいと思う。しかし一方で、その教材が Pattern Practice で処理するのが一番賢明なものかどうか、判断する力もほしい。これはバランスの問題だろうが、この段階では、それだけのエネルギーと時間をかけるなら、他にもっととりいれたい作業のある教材もあるはずである。

最大の問題点は、「これをしている間、生徒は何も考えないのではないか」ということだろう。たしかにそう

いう側面はあるので、50分の授業のうち15分をこの作業にあてた場合、あとの35分をその分よけいに「考えさせる」内容にする努力をしたい。

それにしても、考えない、あるいは機械的だということとはマイナスばかりなのだろうか。厳密に言えば考えさせないのは語順や文法のこと（はじめはそうはいくまいが）であって内容のことではない。Pattern をおぼえさせることが最終目標なのではなく、基本的なことを機械的におさえてしまっ、生徒の感覚を自由に働くようにしてやる必要があるのだと思う。

Pattern Practice がうまくいかないのは、教える側の扱いに問題がある場合も多い。教室内にリズムカルな緊張感をうみだせれば成功だと思うが、そのためにはどうすればよいかを、教案の作り方と、教室作業の要領とにわけて考えてみた。

教案をつくる

教案をつくる時は、材料の sentence を、

- ・ どういう中味 (文のもつ situation) を
- ・ どういう形式 (文の structure) に

のせてあるかという、2本の座標軸から考えてみることにしている。

というのは、私は英語を教える時には、Reading の時間にしても Composition の時間にしても、基本的にはこの中味と表現形式との関係をしてできるだけ厳密につめていく、ということを目指しているからである。

それには今までのような「訳」や文法的解説だけでは物足りない。そこで Pattern Practice を動員しようというわけである。2本の座標軸でいうと Reading では structure の方を、Composition では situation の方を動かすことに重点をおいてはどうかと考えている。Pattern Practice の意味は反復練習の回数をふやして定着をはかるということだけでなく、この「動かす」とい

うところにもあるのだ。つまり「動かしてみる」ことによって、文中の語同士のかかわり方を見、文の構造を立体的に感じることができるのではないかと思うのである。

Pattern Practice の場合、仕事はとかく sentence 単位になる。しかし sentence 単位だからだめ、といわずに、sentence 単位の仕事がこの方法の役どころなのだと考えた方が賢明だと思う。他に、sentence 相互のかかわり方、paragraph の構成、paragraph 相互の関係など、きわめて重要で本質的な問題はありますが、それは別の方法によればいいのだ。ただし、sentence 単位の仕事はそれと無関係なところにあるのではなく、sentence を構造的にとらえることが、paragraph や文章全体も構造的に（感情からでなく）正確にとらえるということの前提になるのだと私は考えている。

Pattern Practice を実施しようとする時は細案を用意しなくてはならない。決してその場の思いつきにたよってはいけない。練習のテンポがおそくなるし、思わぬ誤りをするのがあって困るからだ。原案ではうまくいかない時の臨機の処置の心づもりもほしい。

Pattern Practice の3つのタイプとそれぞれのねらいは次のようである。やさしいものからあげると、

〈Substitution Drill〉

Laura went to the town to work.
Ogawa went to the town to work.
Ogawa went to the City Hall to work.
Ogawa went to the City Hall to prepare for the concert.
Ogawa went to the City Hall to attend the concert.
We all went to the City Hall to attend the concert.

そのクラスの小川が市民会館で行なわれた音楽会の係であった場合の展開である。

〈Conversion Drill〉

Laura went to the town to work.
Did Laura go to the town to work?
Where did Laura go to work?

この表のようにそろえてかく方法を、板書の時に使い生徒にも使わせている。この展開のプロセスをのみこませると文の構造を意識させられると思う。その意識が、英文の解釈や組立てにも役立つのではないだろうか。

〈Selection Drill〉

So Laura went to the town to work and began to feel really grown up, for she wore her hair on top of her head and had long skirts.

1. Did Laura go to the town to work?
2. What did Laura go to the town for?
3. Did she begin to feel really grown up?
4. Was it because she wore her hair on top of her head?
5. Why did she begin to feel really grown up?
6. Was it also because she had long skirts?

□の中の文について、例えば①～⑥のような疑問文をつくって練習を行なう。生徒は問いのくり返しの他に、答えの方も要求されるが、これはただの会話ではなく文型「練習」なので、問いと同じ structure を用いて全文答えさせている。

Substitution Drill に期待するもの

このタイプは、文の一部をいれかえるだけなので、気をつけないと作業が退屈になりやすいが、ひとつの structure にさまざまなイメージをのせることができるのが特徴だ。そこでもとになる文(例えば教科書の中の)の situation を少しずつ入れかえて、生徒の身近なものにまでもってくるようにする。使いなれた単語にいれかえたり、その場にいる人の名前を使ったりする。逆に身近な文、既習の文から徐々にかえて教科書の文までもっていくこともできるだろう。いずれにしても、ある文と生徒とを近づけて、自分を表現するのに使いやすくしてやるわけだ。これが私の考える Composition のベースである。

Conversion と Selection Drill をどう使うか

この2つは、Pattern Practice の分類では別の種類に属するのだが、用いる語彙がほとんどかわらないところで structure をうごかしてみる、という共通点がある。structure をうごかしながら、単語の意味の寄せ集めからでなく構造から、文の内容を適確にとらえる力をつけてやりたい。これが私の思う、基本段階の Reading である。

用いる語がほとんどかわらないので、collocation の上でまちがいをする危険が少ない。その点 substitution の案をつくるよりも気が楽である。内容も構造も複雑になってくる高校段階の教材についても使いやすいと思う。ただし、selection の場合は問答の形式になるので、生徒が答えを選ぶよりどこになるように、ある程度ストーリー性のある教材を使いたい。

正直なところ、毎時間細案をつくるのはつらい。しかし、授業案というのは生徒の実力、教師の実力をふまえた処方箋のようなものなので、たいへんでも自分で考え

て作った方が drill もうまくいくのだ。教案がうまくできれば授業は半ば成功したようなものだし、このための時間と努力は何よりも教師の英語の brush-up に役立つのだ。

教室で

Reading Drill

慎重に準備された教案ができれば、実際に Pattern Practice に入るわけだが、その前にかならず Reading Drill をする。

材料となるのはすでに内容がわかったもので、文章全体を「おなかから声を出して全員よくそろってよめるまで」練習する。声の出し方は大切で、口先だけでは体とつながらず、音が自分のものにならない。これは、ことばを「体をつかって自分のものとしてとらえさせる」ということなのだろうかと思っている。

Sentence をひとつずつとりあげて、はじめはその半分か3分の1くらいずつ仕上げていく。モデルとなる英語のイントネーションはいつも同じカーブを描くように、スピードも注意して選んだ上で、生徒にも同じスピード、イントネーションでくり返させる。全員がそろうまで、根気よくていねいに指導する。時間が予定をこえそうなら、量をへらして、一部だけでもいいから完成した形までもっていく。口頭練習のためには音読が完成していることが必要条件なのである。口頭練習が熟してくれば音読もうまくなる、という循環関係があるので、なれてくればだんだん時間はとらなくなるはずだ。

この作業は、ふつう一日の procedure のおわりにおいて、次の時間の Pattern Practice の下敷きにする。

口頭練習

どのタイプのものも手順と作業のタイミングは同じである。かるく皆でよんでから本をとじさせて練習に入る。ふつうは前時の復習作業として procedure のはじめに15分くらい行なう。

展開のもとになる文 (selection の時は問いの文) は、ふつう教師が英語で与える。その後の練習のリズムやイントネーションの基礎になるものだからである。生徒が文全体のリズムをうけとってくれたと感じるまでくり返す。2～3回でできたら成功である。

- ・生徒の反応がでてくるまでにあまりくり返してやらねばならない時は、教案に無理があるかもしれない。その時は modifier などはずして簡単にするか、思いきってその文はやめてしまう。

- ・全文がいちどにできないと感じた時は部分にわけたくなるが、リズムが死んでしまうことが多いのであまりよくない。どうしてもその文が捨てられない場合はそれなりの扱い方もあるが、なるべくそういうものはさけた方が賢明だ。だからといってやさしいものばかりにしてしまうのも問題だが、長いもの、複雑なものに挑戦するのは、1時間にひとつくらいがいい。

生徒がいえそうな顔つきになってきたら、全員いっしょに、そろってくり返させる。

- ・もとになる文については、モデルをその都度与えながら2～3回ついていわせて、リズムを自分のものにさせておくのが、変形練習のための基礎づくりになる。

全員がうまくいえたら、その残響のあるうちに変形のための cue を出し、一呼吸おいて個人を指名する。一呼吸おかないと、指名されなかった者たちは授業の外へ出てしまう。

- ・指名された者が正しく答えられたら、そのまま全員にくりかえさせる。
- ・答えが正しくなくても小さなまちがいがいたり、答える声が小さくてクラス全体にきこえなかったと思われる時は、教師が何げなくいい直してから全員にいわせるようにする。
- ・まちがった答えがでたら、すぐ訂正せずにもとの文をくり返すところから全員でやり直す。今回は答えられそうならもう一度機会を与え、だめなようであれば別の者を指名する。

モデルの英語のスピード

教師は生徒の心理状態にいつも敏感でないとうましくない。それをふまえた上で、速度やくり返しの回数など加減しながら教室内に快よいリズムをつくりだして、生徒はそれによって楽に英語を口にできるというのがいいと思う。

リズムをつくりだすためには、教案をつくる時に注意することの他に、モデルとなる英語のスピードの問題がある。ちょっと考えるとゆっくりの方がやさしい気がするが、生徒の立場で考えるとそうばかりとはいえない。ゆっくりと、それもぼつぼつ切りながらきかせると、きいている方は音のイメージがぼらぼらになって、文を音のかたまりとしてとらえにくくなる。当然ついていうのもいいにくくなる。だから、モデルはいく分早めのスピード

ードでひと息にいい終えるようにした方がいい。そのためには教師は、たとえ教室にむかう廊下でもいいから、あらかじめ練習する必要がある。

又、ここでのスピードは、音読の際すでに計算されているべきである。

生徒の Choral Repetition

生徒はモデルに従って全員でくり返すことになるが、声がそろわないと練習の効果はずっとへってしまう。そろえるためには、お互いの声をよくきくようにさせる。きくこと自体勉強になるし、つられていえるようになる者もでてくる。大人数のよくそろった Choral Work は、予想以上の効果を生む。うまくいった時は、クラスサイズの大きいのも悪くないと思うくらいだ。

生まれたリズムは大切に——機械的であって同時に感覚的であること——

こうして生まれたリズムは、生徒にも協力してもらって大切にこわさないようにする。cue も短く、手ぎわよく、リズムにのって出す。そのためには、生徒にこちらの意図がはっきりわかるようなものに工夫しておかなくてはならない。それでも指名されたものがまごついたり、説明をいれなくてはならなかったりしたら、誤答の処理のときと同じようにひとつ前の段階へもどって全員でリズムのたてなおしをする。

この「リズムにのる」ということが、機械的作業と感覚的なものとの仲立ちをするのである。生徒も退屈せずにするのだ。

(Continued from p. 12)

tions where English is essential for communication. To some extent this happens at IIST since following the intensive period trainees do have to take some courses that are given in English. However, they also at the same time will be taking many more courses given in Japanese, and invariably their command of English will slump. Occasionally some of us wonder whether the eight-week intensive English program was worth the effort.

Having said this, let me observe that every year when I go on home leave I meet a number of the Old Boys from the school. They are all doing well in their assignments

はじめて試みる場合のために

Pattern Practice の完成した形を今まで経験のないクラスへそのまま持ちこむのは難しいかもしれない。無理をすると疲れるし、リズムも生まれにくい。そういう場合は、あわてずにまず Reading Drill のところからかためて、その効果が循環してくるのを待つのがいいと思う。又、selection まで進まずに、3か月位は conversion だけで基礎づくりをした経験があるが、割に無理なく先へ進めたように思う。selectionの方が面白味があるのだが、文の structure を考えるという意味では conversion だけでも十分効果があるはずである。

Pattern Practice の役割

今回は問題を how to teach の、それも Pattern Practice の部分に限定した。しかし本当に大切なのは what to teach で方法論はそれに基づいて選ばれるものだと思う。私は、高校段階における外国語教育の what to teach は、自己認識とからめての言語意識の問題と考えている。つまり、いいたいことを意識的にとらえることと、それと表現形式とのかかわりということである。

この目標のために、教材の選択や扱い方の姿勢、つまり自分なりの言語感といったものを整理検討しておかなくてはならないのはもちろんである。しかし、実際の授業の場で生徒と共にする作業については、きわめて具体的な、ストイックとさえいえる地平から始めるしかない。その意味から、Pattern Practice も考えていきたいと思っている。

(東京都立神代高校教諭)

abroad and they have absolutely no difficulty in communicating in English. Somehow they have made the great leap forward, from formal classes to living and thinking in English. I should like to think that the eight-week intensive course provided the framework and the basics for this, though I suppose we shall never know for certain. They seem to think so.

(Douglas W. Overton, formerly executive director of the Japan Society in New York, has for the past seven years served as Special Advisor to the President of the Institute for International Studies and Training at Fujinomiya. He is also a member of ELEC's Board of Councillors.)



バラッドの世界 (その8)

—“Who Killed Cock Robin?” をめぐって—

HIRANO KEIICHI

平野 敬 一

殺された雄の コマドリを葬う “Who Killed Cock Robin?” の唄は、英語の伝承童謡の中でも特異な、ふしぎな魅力をたたえた唄であり、歌曲としても類がないほど美しいので、多くの人の愛好するところとなっている。私も教室でこの唄の解説を繰り返して行ってきたし、教室外でもその紹介の機会を何度かもらった。この唄の文献初出の2年前(1742)に首相の座を下りた Sir Robert (“Robin”) Walpole に対する政治風刺の問題、脚韻にみられる古い時代の痕跡(たとえば “owl” と “shovel” の押韻)、あるいはこの唄と古い動物説話とのつながりなどについて、オービー夫妻の解説を主たる拠りどころとしながら、自著などで私はしばしばの専門家づらをして、しばしば解説の筆を執ってきたものの、この唄の含意やフォークロア的な根について、自分でなっとくがいくほど分かっているわけではけっしてない。むしろ釈然としない、分からない点の方が多いのである。たとえば、コック・ロビンの唄のだいたい最後に登場するあの雄牛。

Who'll toll the bell?
I, said the Bull,
Because I can pull,
I'll toll the bell.

(鐘をならすのはだあれ?
わしだよ、と雄牛がいった。
引っぱることができるからね、
わしが鐘をならそう。)

この雄牛はマザー・グース絵本の中でもたいがいそのままの姿で(つまり雄牛として)登場し、会葬者の一員として私たちの方でもう見慣れてしまったせいか、ほとんど違和感がなくなっているが、考えてみたら、場違いの登場人物に違いない。小さい鳥たちの中に、なぜ図体も、分類も、まるで違う雄牛が入っているのだろうか。こんなことも私には、まだよく分からないのである。

この Bull は、元来は bullfinch (アカウソ) という鳥の短縮形であつたらうという説もあるにはあるが、そう

すると bullfinch が力持ちというムリが生じる。(アメリカのヴァージョンでは Bull ははっきり “I am strong and I can pull” と自分の力を誇示している場合が多い。北原白秋訳は「私は引ける、力がござる」となっているし、谷川俊太郎も「なぜならわたしはちからもち」と訳している。) まあ、pull と韻を踏むおかげで、場違いを承知で Bull が駆り出された、と考えるのがいちばん無理のない解釈かもしれないが、それにしてもこの雄牛はいささか始末が悪い (“bull in a china shop” というほどではないが)。

しかし鳥たちの会葬に雄牛が加わるのが場違いというのなら、通常この唄の第3連に登場する Fish についても、そういえないだろうか。

Who caught his blood?
I, said the Fish,
With my little dish,
I caught the blood.

(血を受けたのはだあれ?
わたしよ、と魚がいった。
わたしの小皿で
わたしが血を受けたのよ。)

もっとも、これも上述の pull-Bull の関係と同じように dish-Fish の押韻で説明することができよう。イギリスの古い格言にも “Better are small fish than an empty dish” (小魚でも空っぽの皿よりまし) というのがあり、dish と韻をふむことばといえば、まず fish を想起するということになるのかもしれない。またこの唄の状況として、この Fish を森の中を流れる小川に住む魚というふうに想像してみると、鳥たちの群と Fish の関係は、それほど不調和でなくなりそうな気がする。また、Fish にはキリスト教世界では不死、再生のイメージがないわけではない。よみがえったイエスがまず口にした食物は「炙(炙)りたる魚(魚)一片」(‘a piece of broiled fish’) だった、というのはルカの伝えるところである (cf. Luke 24:42)。したがって (これは少々こじつけになりそう

だが), 死んだコマドリの血を受ける役目を魚が買って出たとしても, それほど場違いといえないかもしれない。それに(とついでに風呂敷を広げさせてもらうなら)北欧神話ではイーミル(Ymir)という巨人族の始祖の血から地球の水分がつけられたということになっており, 水中生物である魚と血の関係は他の鳥たちより深いともいえるのである。

とまあ, こんなことを手際よくまとめるなら, 「コック・ロビンの唄」の第3連のいちおうの解説になるのかもしれないが, この連の3行目の“with my little dish”の説明がついていないし, なんとなくまだ心もとない。こういう場合, 伝承バラッドの側から, なんらかの照明を与えることができないのだろうか。

“Lamkin” (Child 93) について

チャイルド93番に「ラムキン」というバラッドがある。ヴァージョンは比較的多く, チャイルド教授はA versionからV versionまで実に22ヴァージョンをそのバラッド大集成(*The English and Scottish Popular Ballads*)に採録している。このバラッドの梗概をほぼA versionに即して述べると次のようになる。

ラムキン(Lamkin)という石工が, さる城主(Lord Wearie)のために築城工事を引受けたが, 竣工しても城主は言を左右にして工事費を払おうとしない。

- 1 It's Lamkin was a mason good
as ever built wi stane;
He built Lord Wearie's castle,
but payment got he nane.
- 2 'O pay me, Lord Wearie,
come, pay me my fee':
'I canna pay you, Lamkin,
for I maun gang oer the sea.'

(大意: 1. ラムキンは名うての名石工; ウェアリー卿の城を建てたが工事費を払ってもらえなかった。2. 「ウェアリー卿よ, 払って下さい。わたしの工事費を払って下さい」。「払うわけにいかないよ, ラムキン君。海外へ行く用があるんだ」。語注: It's 語調を整えるだけの虚辞; wi stane=with stone; nane=none; canna=cannot; maun gang=must go; oer=over.)

城主の仕打ちが頭にきたラムキンは, ひそかに復讐を誓う。ウェアリー卿はしばらく城を留守にする必要が起り, ラムキンによる復讐を予感したのか, 留守を守る妻にくれぐれも戸締まりに気をつけるように言い残す(“Bade his lady weel the castle keep”). それにもか

かわらず城の方にこの石工と気脈を通じる「裏切り乳母’ (“false nurse”) がいて, ラムキンを窓から城に導き入れる。他の使用人たちのいないことを確かめてから, 石工ラムキンは城主の幼な子をナイフで刺す。刺された幼児は大声で泣き叫び, 奥方がその声で目をさます。「奥様が直接お出にならないと泣き止みません」

'He winna still, lady,
till ye come down yoursel.'

(winna=won't; still=be quiet; yoursel=yourself) という裏切り乳母のことは奥方は寝室から階下へ下りてくるのだが, そこで待ち伏せているラムキンにつかまる。自分の命だけは助けてくれ('O mercy, mercy, Lamkin, hae mercy upon me!')と奥方は懸命の嘆願をするのだが, 結局ラムキンに刺し殺される。やがて戻ってきた城主は, 流された血の痕から兇行を知り, 下手人の石工とその補助者の乳母の2人を処刑する——というのがおおよその筋。

工事費を払ってもらえなかったばかりに(原因はおそらくそれだけではあるまい, と多くの研究者は推定するが), 石工が城主の留守中にその奥方と幼児を殺害するというきわめて残酷な話ではあるが, 伝承バラッドの中で際立って残酷というわけではない。この程度の残酷さは別段めずらしくはないのである。

コック・ロビンの唄と「ラムキン」のつながり

さて, このチャイルド93番のバラッド「ラムキン」と伝承童謡の「コック・ロビンの唄」とがつながるのは, ラムキンが奥方を殺害するに先立ち「裏切り乳母」に'bason' (=basin) をきれいにしてくれ, と指図する個所である(A version, 第21連)。

O scour the bason, nourice,
and mak it fair and clean,
For to keep this lady's heart's blood,
for she's come o noble kin.

(乳母よ, 水盤を磨いてきれいにしてくれ。奥方の心臓から流れる血をとっておかないといけな。なにしろ奥方は高貴の生まれだから。bason=basin; nourice=nurse; mak=make; o=of,)ところが, 奥方に恨みのある乳母は素直に言うことをきこうとしない(第22連)。

There need nae bason, Lamkin,
lat it run through the floor;
What better is the heart's blood
o' the rich than o' the poor?

(水盤の必要なぞありませんよ、ラムキンさん。血は床にしみこませたらいいですよ。金持ちの心臓の血が、なんで貧乏人の血にまさるものですか。nae=no; lat=let; What better...=How much better...). たとえ乳母がなんといおうとも、ラムキンには血(特に高貴の血)を粗末にしてはならないという配慮(おそれ?)が働くのである。この点がたいせつだと思う。

血を受ける容器は清浄でなければならない。血を受けるまえに、その汚れを落として清めなければならないのである。チャイルド93番の A version ではそのように明記されていないが F version では、この血を受ける容器は 'silver basin' になっていて、そこらへんころがっている洗面器の類でないことを示している (G version では 'gold basin' になっている)。入れものなんでもいい、というわけではないのである。

私たちは前稿の "Vandy, Vandy" (story) の中で銀という金属がもつ魔除け的な力をみたわけだが(ワシントン銀貨が witch を退治した)、おそらく流された血にこもっている怨恨(それは加害者に対する魔力として作用する)を中和するために、ここで銀が登場するのは、いちばん自然(すくなくともフォークロア的には)であるように思われる。

「ラムキン」のアメリカ版

アメリカには「ラムキン」のヴァージョンがいくつか伝わっている。先年亡くなったノース・カロライナの伝承歌手プロフィット (Frank Proffitt, 1913-65) も "Bo Lamkin" という題でこのバラッドを歌っている¹⁾。その中の私たちの主題と直接関係のあるところだけを見ると、こうなっている。城主の奥方がボー・ラムキンに命乞いをするところで奥方は、娘の Betsy を提供するから、自分の命を奪うのをしばし猶予してほしい、と嘆願する。

Bo Lamkin, Bo Lamkin,
Spare my life one hour,
You can have my daughter Betsy,
My own blooming flower.

(ボー・ラムキン、ボー・ラムキン、1時間だけ私を殺すのを待ってほしい。花のように美しいわが娘のベツシーを差上げますから。)しかしボー・ラムキンは次のようにこの取り引きを拒否する。

Oh, keep your daughter Betsy
For to go through the flood,
To scour the silver basin
That catches your heart's blood.

(娘のベツシーは生かしておこう。血の川の中を歩いて、お前さんの心臓の血を受けとめる銀盤をきれいにしてもらおうのだ。)ここでもやはり血を受ける容器は silver になっている点に注意されたい。プロフィットの歌うヴァージョンは、1939年にアメリカ国会図書館の音声資料部が採録した "Bolakins" というヴァージョン²⁾ とほぼ同じものである。"Bolakins" にももちろん 'silver basin' が出てくる。

他に筆者の手もとにあるこのバラッドのアメリカ版といえぱリーチ編のバラッド本 (*The Ballad Book*, edited by MacEdward Leach. New York: 1955) に収録されている Maine version の "False Linfinn" と Ohio version の "False Lambkin" ぐらいであるが、いずれも上記のヴァージョンと大差はなく、母親の血を 'silver basin' で受ける役を娘にあてがっている。たとえば "Bring down your daughter Betsy, she may do some good/ For to hold the silver basin for to catch your heart's blood" (Maine version) (娘のベツシーを呼んでこい。お前さんの心臓の血を受ける銀盤を持つぐらいのことはできよう) というように。

再び「コック・ロビンの唄」

さて伝承バラッドの「ラムキン」のいくつかのヴァージョン(特にアメリカ・ヴァージョン)に出てくる 'silver basin' と、伝承童謡「コック・ロビンの唄」に出てくる 'my little dish' を、いずれも殺されたものの血を受ける容器として同列に考えていいように思われる。両者のつながりがまだ釈然としない人のために、こんどは「コック・ロビンの唄」の 'my little dish' を、もう一度検討してみることにしよう。

「コック・ロビンの唄」の初出文献は、普通イギリスの最初の伝承童謡集成 *Tommy Thumb's Pretty Song Book*, vol. II (1740年代刊行と推定される)とみなされている。もっともこの童謡集にはいっている「コック・ロビンの唄」は全4連の短いものである。しかし、この4連に関するかぎり、オービー夫妻編その他現行のイギリス伝承童謡集がかかげている形とそれほど違ってはいない。たとえば問題の Fish が登場する第2連は

1) *Frank Proffitt Sings Folk Songs* (Folkways Records, FA-2360) に収録。

2) *Anglo-American Ballads* Edited by B. A. Botkin (Library of Congress, AFS L7) に収録。

And who did catch his blood,
I said the Fish,
With my little Dish,
And I did catch his blood.³⁾

となっていて、私たちは英語の変化の少なさにむしろ驚かされるほどである。これで見ると「with my little dish」という形は二百何十年來、変わっていないことになる。ただし、これはイギリス版「コック・ロビンの唄」の話であって、目をアメリカに転じると事情はいくぶん異なってくる。

イギリス版「コック・ロビンの唄」が長短（つまり連の数の多少）はあるものの、比較的画一的であるのに対して、アメリカ版「コック・ロビンの唄」にはヴァリエーションが非常に多い。筆者の手もとにだけでもこのアメリカ版は数種類ある。その中でもアメリカ版の特色を比較的好く示しているように思われるヴァージョンを一つ挙げてみよう。

Who killed Cock Robin? Who killed Cock Robin?
I, said the sparrow, with my little bow and arrow,
It was I, oh, it was I.

Who saw him die? Who saw him die?
I, said the fly, with my little teensy eye,
It was I, oh, it was I.

Who caught his blood? Who caught his blood?
I, said the fish, with my little silver dish,
It was I, oh, it was I.

Who dug his grave? Who dug his grave?
I, said the snake, with my little spade and rake,
It was I, oh, it was I.

Who made his shrouden? Who made his shrouden?
I, said the beetle, with my little thread and needle,
It was I, oh, it was I.

Who lowered him down? Who lowered him down?
I, said the crane, with my little golden chain,
It was I, oh, it was I.

Who preached his sermon? Who preached his sermon?
I, said the crow, just as fast as I could go,
It was I, oh, it was I.⁴⁾

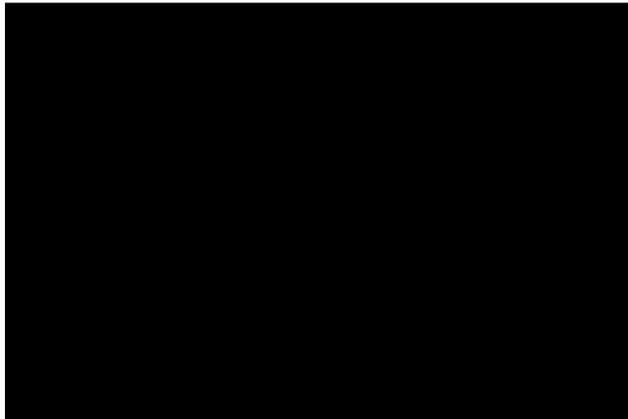
大意はかかげるまでもなかろう（ただし第5連 shrouden=shroud）。ケンタッキー州の有名な伝承歌手 ジーン・リッチーが歌っているヴァージョンもこの流れを汲むものである。アメリカ版コック・ロビンの共通点は 'It was I' という答えが各連で2度ずつ繰り返される点、棺おけ（あるいは遺体）を金の鎖を使ってアオサギ（crane）が墓の中に下ろす点などであるが、いちばん注目したいのは、殺されたコマドリの血を受ける魚が、イギリスの標準版におけるように 'my little dish' でなく 'my little silver dish' を使っている点である。リッチーの歌うヴァージョンもこの点は変わらない。

これはラムキンが血を受けるのに使った 'basin' が銀製だった（たとえば Child 93F）ことと、みごとに照応する。語調を整えるだけのためなら、別に 'silver' でなくてもいいはずだが、ここではどうしても——やや大ざっぱな言いかたをするならフォークロア的に——'silver' でなくてはならないのである。

伝承の世界（私がかつて「もと唄の世界」と呼んだもの）のどこかで伝承バラッド「ラムキン」の 'silver basin' と伝承童謡「コック・ロビンの唄」（アメリカ版）の 'little silver dish' がつながっていると考えるのは、きわめて自然のことであるように思われる。また 'silver' という修飾語が、たとえば「ラムキン」（Child 93A）と「コック・ロビンの唄」（イギリス版）におけるように、表に出していない場合でも、それぞれの血を受ける容器がどこかでつながっているのではないかと考えるのは、これもまた自然の筋道であるように思われる。こじつけとか牽強附会ということにはなるまい。

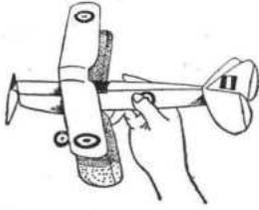
一見他愛のないようにみえる伝承童謡も、その根を深く伝承の世界に下ろしていることが多い。伝承バラッドと伝承童謡の、ある詞句の呼応の中に、しばしば私たちは、その根の深さを垣間見ることができる。

（東京大学教授）



3) 句読点は The British Museum 所蔵本コピーによる。活字の書体は当然現在のものと異なっている。

4) Mickey Miller Sings American Folk Songs (Folkways Records, FA 2393) に収録。このヴァージョンは North Carolina から。メロディーにアメリカ黒人音楽の影響がみられるという。



英語の諺(その6)

—愚人と賢人—

TODA YUTAKA

戸田 豊

青年と老人の次は、愚かな人と賢い人である。愚かな人といい、賢い人といっても、人間を二分できるということではなく、人間には愚かな面と賢い面があるということである。ばかさ加減からだけ見れば、人間どれもこれもばかである。Charles Lamb (1775—1834) の有名なことばに “I love a fool.” がある。われ愚人を愛す、ということは、人間だれにも愚かな面があって、その愚かな面を背負って人の世に生を送るがゆえにお互いにおしおしみあいの気持が必要なのだ、ということである。愚かさゆえに、人間は人間たりうるのである。われも人も愚かなり、それだけにかえて人間という愚劣なる者どおしに好感が沸いてくる。諺に出てくる愚かさの表現は、万人に向かって語られたことばであり、万人を象徴することばである。

If all fools had baubles, we should want fuel.

すべての人間はばかである。まことに切ない言い方ではあるが、諺をもって語らせてみよう。If all fools had baubles, we should want fuel. (ばかが皆笏杖(せきじょう)を持てば、薪が不足するだろう) この諺の形態は、If every fool held a bauble, fuel would be dear. (ばかがそれぞれ笏杖を持てば、薪の値段は高くなるだろう) / If all fools had [were to wear] baubles we should want fuel [fuel would be dear]. ともなっている。baubleとは、昔、宮廷道化師が手にしていたろばの耳のある面を彫り込んだ棒である。ばかがばかを象徴する物にするとすれば、人間すべてが持つことになってしまう。この世の中にはぼう大な数の愚人がいることを表わした諺である。If all fools wore white caps we should seem a flock of geese. (ばかが皆白い帽子をかぶればわれわれはがちょうの群に見えるだろう) もまた同じことを表わしている。baubleを用いた諺には、自分の家庭や職場などの悪宣伝をしてはいけない、という意味を表わす A fool should never hold a bauble in his hand.

(ばかは手に笏杖を持つべきでない) がある。

ばかが充満しているのがこの世の中だから、お互いのばかさぶりは、自分の知らない人にまでも知られることになる。More know Tom Fool than Tom Fool knows.

(ばかが知っている人々よりもっと多くの人がそのばかを知っている) は、自分のことは自分が知っている人々よりもっと多くの人々に知れ渡っている、ということから、ばかなことで名が売れているのは名誉なことではない、という内容を表わしている。Tom Foolとは、知的に劣る人のことである。なお、この諺は、There's more knows Tom Fool than Tom Fool knows. とも表わされる。

Cracked pipkins are discovered by their sound.

ばかの属性の一つは多言である。人間のことばと行為について、諺は実に多くの事例を提供してくれているので、別に章を設けなければいけないが、ここではばかの場合に限定して必要最小限にとどめる。Cracked pipking are discovered by their sound. (ひびの入った土びんはその音でわかる) は、無知な人はしゃべるとその正体が人に知れる、ということである。無知はしゃべるとばれるもので、無知な人は無知を隠そうとしてかえってしゃべりまくる。その結果ますます愚かさを証明するものである。Empty vessels make the greatest sound.

(からっぽの容器はくたくと>もっとも大きな音をたてる) は、無知で愚かな人ほど大きな声で多くをしゃべる、ということである。無知な人はなまかじりの知識と浅知恵を博学多才と混同して、人に押しつけて得意然としている。Full vessels sound least. (いっぱい入っている容器は音をたてない) が対照となる諺である。

川の流れにたとえて言えば、Shallow waters make the greatest sound. (浅い川がもっとも大きな音をたてる) は、浅薄な人を表わし、Still [Smooth] waters run deep. (静かに流れる川は深い) / Water runs smoothest

where it is deepest. (もっとも深い所で水はもっとも静かに流れる) は、口数の少ない人は思慮深く、学識があり、感情に富むということを表わす。したがって、Beware of a silent man [dog] and still water. (無口な人〔犬〕と音無し川に気をつけよ) ということになる。日本でも、「浅き瀬にこそ仇浪(な)は立て」「浅瀬に仇浪」のように流れの比喩を用いている。「能ある鷹(たか)は爪(つめ)を隠す」「鳴かぬ蜚(ひ)が身をこがす」ともいう。ただし、Still waters run deep. には、だまって謀反を企てる者がもっともこわい、という意味もあるので用心がいる。その他、A loud laugh shows an empty mind.

(高笑いは空虚な心の現われ) は、高笑いはばか笑い、であり、The worst wheel of the cart creaks most.

(一番悪い車輪がもっともきしむ) は、もっとも無知な人がもっとも大きな声で話す、ということである。なお、この後者の諺は、働きの悪い怠け者はいつもふうふう不平ばかり言うものだ、という意味もある。とにかく、無知で愚かな人ほど声高にわめくものであり、A wise head makes a close mouth. (賢い人は口を閉ざす) は、賢い人は口を慎むものだ、と教えている。

A fool's tongue is long enough to cut his own throat.

さて、もう少しばかことばの関係を見てみよう。文献に早くも13世紀から出ている諺に A fool's bolt is soon shot. (ばかの太矢はすぐに放たれる) がある。戦闘で弓を射る場合、ねらいを定めて有効に射るのがふつうであるが、ばかな射手はめくらめっぽうにところかまわず矢を放ってしまうので、手元に矢はすぐなくなってしまう、ということから生まれた諺である。思慮の浅い人は、すぐに知恵を出しつくして、その見解のもろさを暴露したり、人にやりこめられたりする。ばかな人は、議論においても、行動においても、すぐに奥の手を出して窮してしまう。A sot's [woman's] bolt is soon shot.

(のんべえ〔女〕の太矢はすぐに放たれる) という形もある。また、A fool's bell is soon rung. (ばかの鈴はすぐに鳴らされる) も同じように、じっと黙っていらなくて、無用のことを言ってしまう、という意味である。A fool's tongue is long enough to cut his own throat. (ばかの舌は自分の首をはねるほど長い) は、口が災いとなって取り返しのつかない事態を招き、はては身の破滅をもたらす、ということである。

その好例が、It is a foolish sheep that makes the wolf his confessor. (狼にほんとうのことを言うのはばかな羊) である。どんな羊でも自分の命を狙っている狼

に心のうちを明かすようなことはしない、ということから、自分の秘密などを軽々しく他人に話して、つけこまれるようなことをするな、という戒めである。Never tell your enemy that your foot aches. (敵に足の痛いことを教えるな) もまた弱味につけこもうとする人に弱味を見せてはいけない、ということである。日本にも、「口は災いのもと」「三寸の舌に五尺の身を滅ぼす」という諺がある。

A word to a wise man is enough.

ばかな人にものごとを説いたり、説得したり、思いとどまらせるには大変な苦勞がある。先に出た No fool like [to] an old fool. は、頑固な老人には言っても聞かせてもわからない、という意味もあるが、ばかの極限に老人を出して、いかにばかは度し難いものであるかを示したものである。それに対して、A word to a wise man is enough. (賢い人にはひとことで足りる) がある。この諺の別の形として、A word to the wise is enough./A word is enough to the wise./A word to the wise./Few words to the wise suffice. がある。この諺は、ラテン語の *Verbum sat sapienti* (=A word is enough to the wise.) がもとになっていて、*Verb. sap.* という省略形でも英語の世界で用いられている。このような「一を聞いて十を知る」に近い意味を持つ諺には、A nod is as good as a wink. (うなずきは目くばせと同じくらい効き目がある) があり、ことばで表現する必要のない暗黙の了解があるので、うなずいても目くばせしても同じように意思が通い合う、遠回しに言っても真意はわかる、という内容を持っている。

ばかな人でも、得意とする分野では、時たままともなことを言うこともある。A fool may (sometimes) give a wise man counsel. (愚かな人が賢い人に忠告を与える時もある) は、自分より優っていると思われる人に忠告したい時に用いる謙譲のことばである。Even a fool sometimes speaks a wise word [to the purpose]. (ばかでもまじなこと〔適切なこと〕を言う時もある) という諺も類似の意味を持っている。ばかも子供と同じく嘘がつけなくて、本当のことをつい言ってしまうことから、Children and fools cannot lie [speak truth, tell the truth]. (子供とばかは嘘がつけない〔本当のことを言う]) という諺も生まれた。しかし、諺は、情容赦なく、Take no counsel of a fool [of green heads]. (ばか〔青二才〕の忠告は聞くな) とも言う。

Experience is the teacher [mistress] of fools.

ものごとくに熟達する最良の方法は、そのことについて経験を積むことである。Experience is the best teacher.

(経験が最良の教師)である。経験することによって新しい知恵も生まれてくる。手をこまねいて、ただ思案投げ首をしているだけでは、こつは身につかないし、名案も浮かんでこない。経験によって人は賢くなる。それを諺では、Experience is the mother of wisdom [knowledge]. (経験は英知[知識]の母)という。Experience must be bought. (経験には犠牲が払われなければいけない)は、みずから経験することによって、またみずからやって誤りをおかすことによって、経験が積まれていくことを表わしている。かくほどに諺は経験を重視しているようである。

しかし、冒険的試行が、旺盛な創造性、充分な思考、綿密な計画の裏付けをもった時にはじめて最良の結果をもたらす、ということ忘れてはいけない。Experience is the teacher [mistress] of fools. (経験はばかの教師)は、ばかはやってみて痛い目にあわないとわからない、ということである。経験する前に何か大事なことが欠けている。Fools are wise after the event. (ばかはことが起こってから悟る) / It is easy to be wise after the event. (ことが起こってから悟るのはやさしい)という諺は、先見の明に欠ける人について言われる。「下種[衆](𠄎)の後智恵(𠄎)」「虚仮(𠄎)の後(𠄎)思案」である。そんなことなら、Wise men learn by other men's mistakes; fools by their own. (賢い人はほかの人の誤りで学び、愚かな人は自分の誤りで学ぶ)のほうが巧妙である。「前車の覆(𠄎)るは後車の戒め」「前車の轍(𠄎)を踏むな」は中国の教えである。

Fools rush in where angels fear to tread.

愚者の愚行の数々を見てみよう。何事も経験第一だからといって、やってみないといかに愚かなことをやったか分からないのはばかの通弊である。Fools rush in where angels fear to tread. (天使も踏み入ることを恐れるような所へばかはとび込む)という諺は、Alexander Pope (1688—1744) が *An Essay on Criticism* の中で用いたことばである。ばかはこわいということを知らないで、性急に事に当たり、賢い人だったら避けることをあたりかまわず言ったりやったりする。この諺は、言行には慎重であれということのたとえである。Discretion is

the better part of valor. (慎重は勇気の大半である)という。向こう見ずな勇気を振うより、用心して不要な危険をおかさないほうがよい、ということである。われわれには、「盲(𠄎)蛇に怖(𠄎)じず」「君子は危きに近寄らず」という諺がある。英語には Fortune favours fools.

(幸運は愚かな人にひいきする)という正反対の諺がある。愚かに向こう見ずに行動する人が幸運に恵まれる、ということである。諺の世界は正に paradoxical である。

Pope が出たついでに、彼が同じ著作の中で用いたことばで諺になっているものを、更に3つつけ加えておく。Homer sometimes nods./Homer nods sometimes. /Even Homer sometimes nods. (ホーマーも時にはいねむりをする)は、ホーマーのような大詩人でもこくりこくりしながら書いたと思われる凡句があるということから、名人にも失策はあるということである。日本でならば、さしずめ、「智者の一失」「上手の手から水が漏れる」「河童の川流れ」「弘法も筆の誤り」「猿も木から落ちる」というところである。もう一つの A little learning is a dangerous thing. (少しの知識は危険なもの)は、learning が誤って knowledge とされることがある。わずかの知識は誤った結論や誤った原理を導く、ということである。「生兵法は大傷(𠄎) [大けが]のもと」である。学問、知識の世界は倦まずたゆまずこつこつと歩いて行くべき世界であって、アレキサンダー大王の家庭教師ならずとも There is no royal road to learning (学問に王道<楽な方法>なし)である。少しの知識は危険なものであるが、諺には例によってその反対を表わすものがある。それは Too much learning makes men mad. (多すぎる知識は人を狂わす)と Much science much sorrow. (知識が多いと困ることも多くなる)である。Pope のことばの最後は、To err is human, to forgive divine. (あやまちは人の常、ゆるすは神の性(𠄎))である。前半だけでも諺として用いられている。われわれはだれでも誤りをおかしがちだし、人には過ちはつきものだということである。Nobody's perfect. (完全な人はいない)、No man is infallible. (過ちのない人はいない)なども同じ趣旨の諺である。

A fool and his money are soon parted.

A fool and his money are soon parted. (ばかとその持ち金はすぐ別れてしまう)には、ばかから金をだまし取るのは易しい、という意味もあるが、普通、ばかは金を持つとすぐに使ってしまう。ばか者の金に明日という日はない、ということである。日本には、江戸っ子の

気前のよさ、気風のよさを表わすのに「宵越(せ)の銭(ぜ)は持たぬ」という言い方があるが、将来のことはよくよしないで今ある金は威勢よく使い尽というすことである。ばかは思慮分別に欠けるところがあるので、前後のみさかいなく金を湯水のように使ってしまうと気が済まない。賢明な人なら有効に使う時が来るまで金はしまっておくものである。英語の *live from hand to mouth* は、貧乏のその日暮らしを表わすとともに、先のことを考えないで、江戸っ子よろしく宵越の銭を残さないような生活ぶりを示すこともある。とかく人は手軽に入った金は気安く使ってしまうがちである。A fool and his money are soon parted. という諺の本意はそれに対する警告である。

らくらくと金を手に入れた人は、その金を浪費しがちであるという意味を、*Easy come, easy go. /Light(ly) come, light(ly) go. /Soon got, soon gone. /Ill got, ill spent. /Come light, go light. /Quickly come, quickly go.* のように多様な形で表わすことができる。たやすく手に入れたものは失いやすい、ということである。日本の「悪銭身につかず」と部分的に意味が重なっている。*Easy come, easy go.* の用例中に、この諺は金についてだけでなく知識についてもあてはまる、という解説があるところから察すると、たやすく入った金が気軽に浪費されていくと同じように、苦勞しないで修得した知識、技能はすぐ忘れ去られてしまうという意味もでてくる。

Fools build houses, and wise men buy [live in] them. (ばかは家を建て、りこう者はそれを買う〔そこに住む〕)は、きわめて現代的な諺かと思われるかもしれないが、実は17世紀から用いられている諺である。ばかは土地を買い、そこに家を建てても、要した費用を工面するためにそれを売り払うようなことをする、ということである。さらに、家は建てて住むよりも他人から借りて住んだほうが賢明だ、ということにもなる。この諺の当否は、人によってどのようにも考えられるのは、やはり、諺の一面真理性のためである。ばかはその言行において慎重さに欠けるとともに人にもたやすく乗ぜられる。他人の口車に乗り易いのはその一例である。The wise hand does not all that the foolish mouth speaks.

(賢い人の手は愚か者の口にすることをすべて行なうとは限らない)という諺の逆の内容を考えれば、ばかの軽率さが一段とはっきりわかる。

Know thyself.

愚行の諺の一つに入れていいものに、I will not keep

a dog and bark myself. (犬を飼っていて、自分が吠えるようなことはしない)がある。Do not keep a dog and bark yourself. ともいうし、修辭疑問の形で Why keep a dog and bark yourself? ともいう。あることをやらせるために雇われている人がいるのに、雇主の自分が代わってやるような愚は避けよ、ということである。はたしてこの諺が現代にうまくあてはまっているかどうかあやしいと思う人もいであろう。それほどに使用者と使用される人の関係は複雑な時代だから。ところで、この諺 I will not keep a dog and bark myself. の形態は一考に値する。この not は (keep a dog + bark myself) つまり「犬を飼っているが自分で吠える」という2つにしてさながら1つの行為とも言える部分を否定しているからである。これはちょうど You cannot have it both ways. (両方ともいいというわけにはいかない)の意味を持つ You cannot eat your cake and have it. /You cannot have your cake and eat it. (お菓子を食べてその上持っているというわけにはいかない)という諺の場合にも言えるのである。

愚かで無知な人にかぎって、でしゃばりでおせっかいである。Know thyself. (なんじみずからを知れ) — このことばはギリシアの Delphi の Apollo 神殿柱廊玄関の上に金文字で彫られてあった句の英訳であるが、哲学者ターレス、ソロン、ソクラテス、ピタゴラスなどのだけかある人のことばであるとされている — ということは知っていても、自らを忘れて他人のことに口ばしを入れ、ときには忠告し、ときには指導したりする愚かな人がいるものだ。If the blind lead the blind, both shall fall into the ditch. (盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう)は、『聖書』Matthew 15.14 からそのままの形で諺になり、Luke 6.39 にも、Can the blind lead the blind? Shall they not both fall into the ditch? (盲人は盲人の手引きができませんか。ふたりとも穴に落ちこまないだろうか)と出ている。無知な人が無知な人を教えるようなことをすべきではない、という教えである。

ばかな人は頑固で偏狭である。かたくなに自分を守って、自己の非と欠点を認めようとしぬものである。He who is born a fool is never cured. (ばかにつける薬はない)という。ところで、日本には「君子はひょう変ず」という諺があるが、英語では、A wise man changes his mind (sometimes), a fool never. /A wise man changes his mind, a fool never will. (賢い人は考えを変えるが、愚かな人は変えようとしぬ)という。事態の変化に合わせて賢い人は考えるものであ

る。A wise man ought not to be ashamed [need not blush] to change his purpose. (賢者はその意志を変えるのを恥じるべきではない) という諺もある。

A wise man is never less alone than when alone.

他人の動静が気になって、片時も落ち着かないのもばかの習性である。じっとして自分のやるべきこと、やりたいことに専念していることができない。人の噂と陰口に余暇を費やす。他人のプライバシーをのぞき見することに快感を見いだす。A wise man is never less alone than when alone. (賢い人は一人でいる時のほうが他のどんな時よりも孤独を感じない) という諺は、ラテン文芸にその起源をもつ古いものである。英文学の世界へは16世紀に入っている。次にその用例を2つ掲げてこの諺の真意を汲み取る参考にしたい。

Abraham Cowley (1618—67) の *Of Solitude* の始まりは、この諺のもとになったラテン文 “*Nunquam minus solus, quam cum solus.*” から始まっている。このことばは、ローマの将軍で Hannibal を Zama で破った Scipio (237または234—183 B.C.) が初めて用いたと述べた後で、その意味を次のように説明している。His (= *Scipio's*) meaning no doubt was this: that he found more satisfaction to his mind, and more improvement of it by solitude than by company; and to show that he spoke not this loosely or out of vanity, after he had made Rome mistress of almost the whole world, he retired himself from it by a voluntary exile, and at a private house in the middle of a wood near Linternum passed the remainder of his glorious life no less gloriously. (シビオがこの句で言おうとしていることは明らかに次のようなことであった。すなわち彼は人と一緒にいるよりも独りでいることによって精神の満足と向上を覚えた。そして彼がローマをほとんど全世界の支配者にした後でこのようなことを言ったのはでたらめや見栄のためではないということを示すために、彼は自ら進んで追放の身となって退き、生地リテルナムの近くの森の中にある私宅で輝かしい生涯の余生を以前にもまして輝かしく送った。)

また、William Hazlitt (1778—1830) の *On Going a Journey* の冒頭は次のようになっている。One of the pleasantest things in the world is going a journey; I can enjoy society in a room; but out of doors, nature is company enough for me. I am then never less alone than when alone. (この世でもっとも楽しい

ことの一つは旅に出ることだ。室内にあっては社交を楽しめるが、屋外にあっては自然が私の友になってくれる。自然を友としている時に、私はひとりである時よりも孤独を感じない。)

賢い人は一人でいる時には瞑想三昧の境地に入り、また自らのなすべきことを自由に行なえるので、もっとも孤独感を味わうことはないのである。「小人閑居して不善をなす」という。If the devil find a man idle, he'll set him to work. (悪魔は人が怠けていると仕事を見つけてやらせる), An idle brain is the devil's shop. (怠け者の頭は悪魔の仕事場), Satan always finds work for idle hands. (悪魔はいつも怠け者に仕事を見つけてくれる) などはいずれも小人に対しては悪魔の手がさしのべられることを示している。

Of two evils choose the less.

Of two evils [harms, ills, mischiefs] choose the least. /Of two evils choose the less(er). (2つの悪からひどくない方を選び) という諺がある。ばかについて、そのばかばかしさを見てきたのであるが、A fool is better than an obstinate man. (ばかは頑固者よりはまし), Better be a fool than a knave. (ならず者よりは愚か者のほうがまし) という諺を見ると、ばかみらいにおひとよしな人のほうが、頑として聞かないかたくなな人よりはましだし、間の抜けた人のほうが恩知らずでずるがしこい人よりも救いがあることが分かる。次の章では、ばかよりも始末の悪い悪人とは一体どういうものかを見ていくことにする。

(静岡県立清水東高校教諭)

(P. 3よりつづき)

ものがあるでしょう。

自動車やカラーテレビではなくて、文化を世界に出そうとしている現代の日本で、20世紀の文化といわれる(文学や音楽は19世紀の芸術だと私は考えています。) テレビ番組で、世界に伍してゆけるものを持たない、閉鎖的で、「強調符文化」の日本は、やはり私は後進国でデモクラチックではないと思います。

後半、言い足りないところが多く、論理の飛躍があると思いますが、お許し下さい。すべては、私の責任ではなく、枚数の不足にあります(責任の転嫁の見本で終わります)。

(国際テレビフィルム株式会社社長)

何を言わないかの言語学*

—皮肉の解体—



原 口 愚 常

1. 何を言わないかの言語学

言語学というときは、一般に、書かれたテキスト、話された発話の記述・説明をすることが中心であった。ところが、郡司利男教授は一連の論考(1975 a, b)において「何を言わないかの言語学」を提唱した。この言語学の主たる役割は、何が言われていないか、なぜ言われていないか、どのように言われていないか等々の観点から、言語および言語文化の諸現象を組織的に考えなおすことによって、従来の記述では得られなかったか、あるいは、得るのがむづかしかったような知見と洞察を明らかにしようとするにある。

言語には、統合関係的な (syntagmatic) 側面と選択関係的な (paradigmatic) 側面の2つの面がある。「何を言わないか」ということは、安井教授の指摘によれば、究極的には、この選択関係的な側面に還元されるものである。なぜならば、「何を言わないか」は「何を言っているか」の補集合であり、何かを言う場合には、可能な他の選択をしないで、「言われている言葉」を選択して用いているからである。

「何を言わないか」という観点から見ると、まず、「何を言わないかの言語学」という言い方はあるのに、「何を言うかの言語学」という言い方はないのはなぜか、ということが問題になる。これは、否定を用いた表現はあるのに、それに対応する肯定の表現はないのはなぜか、と問いなおしてもよい。

この問いに対する答えは簡単で、そもそも、これから「何を言うか」ということは、一定の条件・文脈などが与えられない限り、通例、予測不可能なことであり、したがってほとんど解明不可能である。このゆえに、「何を言うか」の言語学というものはありえないということになる。

それでは、「何を言わないか」に対応するものとして「何が言われているか、何が言っているか」の言語学という言い方が普通ないが、これはなぜかと問うとどうなるであろうか。第1に、「何を言わないか」というのは有標 (marked) であるのに対し、「何を言っているか、何が言われているか」というのは無標 (unmarked) である、というところにその答えを求めることができる。すなわち、有標の方を「何を言わないか」という表現で表わすなら、無標の方には「何が言われているか」という表現を付与する必要はなくなり、単に言語学と言えばよいことになる訳である。しかもこれに加えて、従来の言語学では、言われたこと・書かれたことが分析の主たる対象であったと冒頭の部分で述べたように、言語学という言い方には、特別な修飾語をつけられない限り、すでに、「何を言うか」という概念が含意されている。「何が言われているかの言語学」という言い方がない第2の理由は、この点にあると言えよう。

「何を言わないか」ということは、「何を言うか」ということと、表裏一体をなしている。ものごとというものは、したがって、この両面から見て始めて全体を明らかにすることが可能になる。従来の言語学が「何を言うか」という面と主として関わってきたとすれば、それと相補の関係にある「何を言わないか」という面から考えなおしてゆくことが重要となるのは、当然であろう。

このような「何を言わないか」という観点から、あらゆるものごとを見てゆくと、実にさまざまなことが明らかにされる。ここでは、言うてはならないとされている表現、つまりタブーの一面を見ておきたい。論争をする場合に、相手をぶじょくして個人攻撃をすることがある。この際に、言うてはならない表現がいくつか出てくる。たとえば、イギリスの議会では、言うてはいけない表現が明確に規定されていて、相手の議員を、たとえば、liar (うそつき) とか villain (ろくでなし), swine (豚), murderer (人殺し) などと saying はならない。

* この論考は、安井稔教授と郡司利男教授の、一連の興味深い論考が引き金となって、生まれたものである。両教授を始め、本稿に目を通して有益な助言を与えて下さった齋藤武生助教授と安井泉講師にお礼を申し上げる。

1) 郡司(1975a, b) 原口(1977)などを参照。

この禁を破ると、けん責処分を受けることになる、ということである²⁾。

何がタブーになっているかということを経験的に考えてゆくのも「何を言わないかの言語学」の課題の一つであるから、英国議会のタブーは格好の研究材料となるであろう。一方、わが国の国会においてはどうかであろうか。明確な形でタブーと規定したものがあるということは聞いたことはないが、暗黙のうちにタブーになっているものが、やはりあるようである。そのようなタブーの存在を示唆するのは、「国会語」とも言うべきものの存在である。議員は、国会語を使わないと、問題がすぐに起ってくる。たとえば、A大臣のように、国会で言うようないい加減なことは言わない、という主旨の本音をもろに出してしまうと、猛烈な追求を受けることになる。またB議員のように「財界の男めかけ」というような直接的言い方をしても、やはり、問題を引き起こす結果となる。このような場合には、まわり道をして、国会語なるものを使って、間接的に言えばよい。「財界の男めかけ」は、たとえば、「男でありながら、財界に〇(マル)をもらい、旦那にかけながらつくしている女性のようなお方」というような言い方になるであろうか。このような、もってまわった表現をすれば、安全に、しかも、「財界の男めかけ」と言うのと同じ(あるいはそれ以上の)効果が得られ、さらには、皮肉という効果も加わることになる。まさに一石三鳥 (!!) と言ってもよいことになる。

今、直接言わなければ皮肉の効果が得られるという点に触れたが、皮肉の根本は、まともに言わないということにあると思われる。野球の比喻を用いて言えば、「男めかけ」というような言い方は、ストレートであるのに対し、それに対応する皮肉を含む言い方は変化球である。この場合、ストレートはタブーにふれ、手痛い一打を受ける恐れがあるのに対し、皮肉という変化球を巧みに投げるなら、相手をうまくしとめることが可能となる。

皮肉の根本は「ものごとをまともに言わないところにあり、」というのであれば、そのしくみを明らかにすることも「何を言わないかの言語学」の観点から、興味深い問題となる。本稿の目的は、この皮肉のしくみに光を当てて解体し、その本質を明らかにし、さらに「何を言わないか」という観点から考えてゆくことにある。

2. 皮肉の成立条件

皮肉はストレートでなく変化球であるから、たとえば、誰かが、古いぼろ自転車に乗っていたら、それを「ク

ラシクな足踏式鉄くず移動機に乗っている」というように言えば、一定の状況のもとでは皮肉になりうる。しかし、皮肉の形式として普通一番多いのは、意図していることとは逆の表現を用いることであろう³⁾。このような基本的認識のもとに、まず、皮肉の成立条件は何かという点から、解体作業を始めたい。

議論の見通しを明らかにするため、結論を先取りした形で言うなら、皮肉が成立するための一般的・基本的条件は、話者が、発言の内容を皮肉のつもりで、その発言行為を行なうというところにあり、かつ、それで必要条件となるということになる。つまり、皮肉を皮肉たらしめている条件は、話者の意図にあり、ほかのところにはない、ということなのである⁴⁾。

このように言えば、すぐに、皮肉が成立するためには、相手に皮肉が伝わる必要があるのではないかと、いう反論が出るかもしれない。しかし、相手(あるいは第三者の聴者)に伝わる伝わらないは、皮肉の必須条件ではない。伝われば一定の効果が生ずるであろうが、伝わらなくとも、話者にとって皮肉は皮肉であることに変わりはない。世の中にはかなりにぶい人がいるし、また相手の考え方によって、一定の発言を皮肉とは解されにくい、ということがありうる、というようなことを考えると、皮肉は、相手に伝わる必要はかならずしもないことは明らかであろう。

もう一つ考えられる反論は、話者が意図しなくとも、相手あるいは第三者が、皮肉を汲み取るなら、皮肉が成立するのではないかと、いう反論である。これは、確かに、聴者の側には皮肉が成立している。しかし、話者の側には皮肉が成立していない。したがって、何らかの形で、聴者が誤って皮肉と受け取っていることが話者にわかった場合には、「いや、今言ったのはそんなつもりで

2) Davis (1976) を参照。

3) くわしくは、安井 (1976a, b) を参照。なお、何をもって皮肉とするかに関する定義にはむづかしい問題が含まれているし、英語の irony と日本語の皮肉とでは、必ずしも重ならない面があるようである。安井教授の論考では「皮肉」と言っているが、実際には irony についての論考と考えるべきであるのかもしれない。本稿では、皮肉をごく一般的に広くとらえて考えてゆくことにしたい。

4) このように書くこと、たとえば次の(i)

(i) This is a pen.

のような表現も、「皮肉のつもりで話者が言うなら皮肉となるか」という疑問が生ずるかもしれない。これは、しかしながら、皮肉とならないことは明らかである。なぜならば、皮肉であるためには、「まともに言わない」というような、形式上の条件とか、一定の状況の存在等々が前提とされているからである。本稿の議論はすべて、このような前提条件を基にしてなされたものである。

はない」というように、皮肉の否定がなされ、皮肉が成立しなくなる。話者が意図しないのに聴者が皮肉を聞くというのは、いわば、思い込みあるいは誤解に基づく皮肉であって、真の意味で皮肉が成立しているとは言えないことになる。

このように見てくれば、一般的に皮肉が皮肉として成立するためには、話者が皮肉のつもりで発話行為を行なえばそれでよい、ということが明らかとなるであろう。ただし、一定の条件（たとえば、文学作品における皮肉というような限定）がさらに加われば、皮肉の成立条件の方にも、一定の条件が加わることになるが、この点に関しては、のちほど立ち戻って考えたい。

次に、皮肉の成立条件ということに関して、話者・相手・第三者が、どのように関わりをもっているか、ということを見ておこう。今仮に、話者が皮肉を意図している場合にはプラス（+）、意図していない場合にはマイナス（-）で表わし、相手および第三者が皮肉を感じるならプラス、感じないならマイナスで表わすものとする。そうすれば、論理的には、次の8つの組み合わせ方が考えられる⁵⁾。

(1)

	a	b	c	d	e	f	g	h
話者	+	+	+	+	-	-	-	-
相手	+	+	-	-	+	+	-	-
第三者	+	-	+	-	+	-	+	-

このうち、8番めの(h)の場合には、話者が皮肉を意図しておらず、相手も第三者も皮肉を感じないのであるから、明らかに、これは皮肉とは関係がないことになる。したがって、何らかの意味で皮肉が問題となるのは、実際には(a)~(g)の7つだけである。この7つの場合について、順に見てゆくことにしよう。

(a)は、話者・相手・第三者のすべての関係者に皮肉が成立している場合である。この際には、皮肉が成立して

いることは明らかであり、この限りで問題はない。(b)では、話者と相手にだけ皮肉が成立しており、第三者には、皮肉が伝わっていない。これは、たとえば、話者と相手にのみ、ある一定の認識あるいは経験があるために、皮肉が、両者の間にのみ伝わる場合である。第三者に皮肉が伝わらないのは、一定の情報が第三者に欠如しているか、あるいは、第三者がうっかりしてその情報を見落しているかして気がつかないか、のいずれかであるためである。

(c)は、話者と第三者には皮肉が成立しているのに、皮肉が向けられた当の相手がにぶいか、あるいは、認識が他の二者と異なるために、相手に皮肉が伝わらない場合である。(d)においては、話者が皮肉のつもりで言ったのに、相手と第三者にはそれが伝わっていない。これには、話者がわざと他人にはわからないように皮肉を言う場合や、他の二者がひどくにぶいかあるいは別の認識をもっている場合、さらには、この二つの状況が重なっている場合などが考えられる。

(e)においては、話者は皮肉を意図しないのに、相手と第三者が皮肉を感じるということが示されている。(f)は(e)と似ているが、相手だけが皮肉を感じる場合であり、(g)は第三者だけが皮肉を感じる場合である。これらは、上で触れたように、誤解に基づく皮肉の感知であり、話者がその誤解に気づいて、それを解けば、皮肉は消えるのが通例である。しかし、誤解されて皮肉が成立しているということが話者に伝わらなければ、誤解に基づく皮肉は、相手あるいは第三者あるいはその双方に成立し続けることになる。

以上見てきたことから、論理的に考えられる7つの場合のうち、真の意味で皮肉が成立しているのは、(a)~(d)だけであることが納得できるであろう。ただし、相手あるいは第三者にとって皮肉が成立しているかどうかというような観点から見てゆくなら、答えはおのずから変わってくることになる。

3. なぜ皮肉を言うか

次に、皮肉を言うのはなぜかという問題に移りたい。その理由はいろいろ考えられるが、安井(1976a)では、2つの理由があげられている。「一つには「スベードでない」という、一般には、好ましくないことを単刀直入に言いたくないからであり、もう一つには「スベードとお思いかもかもしれませんが、それは大まちがよい、本当はその正反対。」という逆転の屈折を含む言い方が、より痛烈であるからであると思われる。」最初の方は、ユーフェミズムやタブーなどと関係するであろう

5) 安井教授の筆者への指摘によれば、話者と相手のみがいて、第三者のいないところで、第三者に関する皮肉を言うことも多いということである。この場合には、何らかの意味で皮肉が生ずるのは、次の3つの場合である。

	a	b	c
話者	+	+	-
相手	+	-	+
第三者	φ	φ	φ

(注：ここでは、φは皮肉の対象となる第三者が場面にいないことを示す記号である。)

(a)は話者が第三者に関する皮肉を言い、相手もそれを察知した場合であり、(b)は相手が皮肉を感じなかった場合である。また、(c)は皮肉のつもりでないものを相手が皮肉と誤解する場合である。

し、第2のものは、表現の効果をねらったものである。このような理由があることには疑問の余地はない。

しかし、皮肉を言う理由はこれに止まるものではない。このほかにも、いくつか考えられる。たとえば、第3の理由として、相手に通じなかった場合には、さらにそれを笑い草にできる（「あいつには皮肉が通じないよ。ニブイネー」などと笑い者にする）ということも考えられる⁶⁾。この場合には、(1)の(c)や(d)のようなことが生ずるなら、もっけの幸い、という場合である。また、第4に、事情を知らない第三者には気付かれたくはない（が、なんとか一矢報いたい）という場合があげられよう⁷⁾。この場合には、(i)相手には皮肉を感じてもらいたい場合と、(ii)相手にも（できれば）知られたくない場合とが考えられる。これには(1)の(b)と(d)が相当していることは言うまでもない。第5に、言い方の巧みさ、おかしさなどを楽しむということもある。この場合には、ユーモアを意図している場合や、言いまわしの妙を自分だけで楽しむ場など、様々な場合が考えられる。

実際に皮肉を言う場合には、上にあげたような理由のうちのどれか一つの理由による場合と、いくつかの理由が重なっている場合とがある。それぞれ、どの理由でもって皮肉を言うかによって、皮肉の言い方も違ってくるのは当然である。タブーなどをストレートに言わない場合には、皮肉であることが確実に伝わるように言うであろうし、痛烈な効果をねらった場合には、その効果ができるだけ発揮されるように言う。ところが、皮肉が通じなければ、さらに笑い草にするつもりの場合には、皮肉であることが、はっきりとはわからないように微妙に言うであろうし、第三者に通じてほしくない場合には、話者は、相手にしかわからないような言いまわしを工夫することになる。これらの理由がいくつか重なるなら、その重なり方によって、皮肉の表現の仕方が微妙に変わってくることになるであろう。

4 伝わる事が期待されている皮肉

以上見てきたことに照らして、安井（1976 a）の主張

6) これについては異論があり、皮肉が通じなかった場合のあのコースの一つではあるが皮肉の理由とは考えない人もいようである。固執するつもりはないが、ここでは一応皮肉を言う理由の一つに含めておくことにする。

7) 安井教授のご教示によれば、これは、婉曲表現、つまり(Griceのいう)情報量を意図的に低くしている表現に共通のもので、特に皮肉に結びつくというものではないようである。ただし、皮肉というものは、ひねった表現の一つであるから、当然、ひねった表現を使う理由となるものが関わってくるのである。なお、事情は、次の第5番目の理由に関して、同じであろう。

を考えてみよう。それによると、皮肉が皮肉であるためには、(i)「皮肉であることが、あからさまに分かってはならない」こと、および、(ii)「皮肉であることが全く分からなければ」皮肉として働かないこと、の2点をあげている。

(i)に関して言えば、しかしながら、相手にまごうかたなく知ってもらいたいときとか、怒りにまかせて皮肉を言うときなどには、あからさまに皮肉であるということがわかるように（あらゆる手段を動員して）言うことがあることなどから、一般には、妥当でないということになる。また(ii)についても、すでに見てきたように、相手や第三者に知られないようにと願って言う皮肉もある訳であるから、やはり一般的に言うなら、妥当性に欠けるということになる。

以上の批判は、皮肉というものを一般的に考えて、その観点から行なったものである。しかし、この批判は、実は、安井（1976 a, b）で暗黙のうちに前提とされていると思われることを意図的に無視して行なったものであり、多少酷であるかもしれない。

それでは安井論文で暗黙のうちに仮定されていた前提とは何であろうか。それは、要するに、「伝わる事が期待されている皮肉ということに視点を限れば」ということである。あるいは、もっと具体的に言えば、「たとえば、文芸作品における皮肉は」と言い換えてもよい。

文芸作品などの皮肉という観点からすれば、皮肉であることがあまりにもあからさまであるよりは、そうでない方がよいし、かと言って、伝わらなくては話にならない。したがって、安井（1976 a）で皮肉の成立条件としてあげてあるもの（つまり上記の(i)と(ii)）は、一定の限定のもとにのみ有効となる成立条件であるということになる。

なお、ここで注意すべきことは、このような限られた条件のもとでも、話者（文学作品の場合には作者）は、皮肉を意図しているということが含まれなければならない。言い方を変えると、このような場合にも、話者の意図が、通例は必要であり、それに加えて、ほかの制限が関与することになるのである。

最後に付け加えるなら、3節で見たように、安井（1976 a）においては、皮肉を言う理由を特に2つだけあげてあるのも、おそらくは、文学作品などにおけるような限られた場合に限定して、皮肉を考えていることと無関係ではないであろう。

5 「何を言わないか」——皮肉の症例

皮肉は一見打ちごろの変化球でありながら、実はかな

りのくせ球であって、まともに投げたストレートとは違うことは、すでに述べた。しかし、くせ球というものは、何くわぬ顔をしてポッと投げるのでなければならない。とすれば、変化球を投げるぞ、というように、相手に前もってわかるような合図を投手がするとすれば、相手がそれに気づいてしまい、せっかく変化球を投げる価値が消えてしまうか、あるいは、著しく弱められてしまうということが予測される。Metaphorically speaking とは言えても、ironically speaking とか、「これは皮肉で言うんですが」というようなことが言えないのは⁹⁾、まさに、このような言い方が、皮肉の皮肉としての価値をなくしてしまうか、著しく弱めてしまうからである。

これを3節で述べた、皮肉を言う5つの条件との関連で見ておこう。第一の理由、すなわち、好ましくないことを単刀直入に言いたくないという理由との関係で考えるなら、皮肉であることがあらかじめわかってしまったのでは、単刀直入に言ったのと、ほぼ同じ結果になってしまう。したがって、皮肉の明確な合図である ironically speaking というような言い方をしないのは、皮肉を言う理由を消してしまうことになるからであるということが理解できよう。また、第2の理由である、逆転的屈折を含む言い方でより痛烈な効果を出すためには、やはり、最初から手のうちがわかるような言い方はしない。

第3の理由である、皮肉が相手に気付かれなければ幸いで、それをさらに笑い草にしようという場合にも、当然のことながら、これは皮肉ですよというような合図はしない。事情を第三者には知られたくないという第4の理由の場合にも、事情は同じである。第5番めの、言い方の妙やおもしろみを楽しむという理由の場合にも、皮肉であるという合図を前もって相手に知らせると、言い方の妙もつ効果やおもしろみが減殺されてしまう。いずれの場合にも ironically speaking とか「これは皮肉で言うんですが」というようなことを前もって言うことはしない。このような結論は、皮肉の本質および、皮肉を言う理由そのものから、自動的に導き出されるものであると言ってよいことになる。「これは皮肉で言うんですが」ということを前もって言わないのは、「何を言わないか」に関する一症例であるが、それは、皮肉のからくりから演えきされることになる、ということを見てきたことになる。

以上、皮肉に視点を限って考えてきたが、もっと視点

を広くするなら、一般に、一定の表現の効果を著しく弱めたり、そこなったりするような言い方はしない、ということになる。たとえば、相手にわからないように殺し文句を言ったり、嘘をついたり、相手をだましたり、ごまかしたり等々のことをしたいと思っている場合に、

- (2) a. *これは殺し文句だけ⁹⁾
 b. *これは嘘だけ
 c. *これはだますつもりで言うんですが
 d. *これは君をごまかすつもりで言うんですが
 e. *これはおせじにすぎないんですが

等々のような合図を前もってつけることはしない。このような合図を前もって出すなら、たとえば、殺し文句が殺し文句としての価値を失ってしまうことになるからである。

6. 皮肉と蛇足——国語辞典の症状

最後に、皮肉について蛇足をあえて追加したい。『明解国語辞典』(昭和39年版)と『広辞苑』(第二版)で、皮肉の項を見ると、まず第一に「皮と肉」とある。なる程おもしろいと感心して次を見ると、『明解国語辞典』と『広辞苑』では、それぞれ次の(6)と(7)のように、その定義は驚く程似ており、さらに興味がそそられる。

- (6) (一) するどい非難。
 (二) いじの悪い、遠まわしの非難。
 (7) (2) 骨身にこたえるような鋭い非難。
 (3) 遠まわしに意地悪く弱点などをつくこと。あてこすり。

この2例だけをもって一般化するのには横着な話であるが、国語辞典の作り方には一定の常識があるらしいから、他の辞典も大同小異であろう。

「皮肉=非難」という公式を短絡的に取り込んでいるのは、正確に言うのと妥当とは決して言えないだろう。が、同情的に見ると、これらの辞書で皮肉の定義をした人は、「皮肉」を言うときには、相手を「非難」するときだけであるのかもしれない。

皮肉は、しかしながら、相手を「非難」するためだけに言うのではない。相手をからかったり、表現におかしみを出したり、タブー表現をさげたり、表現の巧みさを誇ったり、等々のようにいろいろなきに使うのである。その本質は、ストレートに何かを言わないで、変化球を用いて相手に打たれるのを防ぐ、ということにあることはすでに述べた。また、見落してはならないことは、かなり多くの場合におかしみ、おもしろみを伴うと

9) このような例は、雑談の際に安井泉講師が、筆者に指摘してくれたものである。

いうことであろう。これが欠けると皮肉におもしろみがなくなる。朝日新聞によれば、最近「皮肉」を言われたというだけで仕返しに犯行をすることがあるそうであるが、皮肉はユーモアの一つという心得があれば、そのようなことがかなり防げるはずであるのに、残念なことである¹⁰⁾。

また、すでに、前節まで見てきたことからわかるように、皮肉は「すどい」こともあれば「悪い」こともあれば「いい」こともあるし、「いじの悪い」こともあれば「悪くない」こともある。したがって、たとえば、

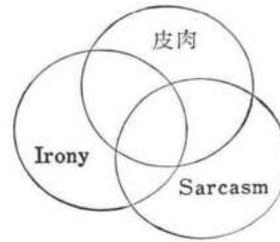
- (8) a. かすかな皮肉をこめて彼は言った。
b. 皮肉と感じられないような皮肉を言ったが、別にいじ悪いものではなかった。

というような言い方には、何の不都合もない。ところが、(6)や(7)のような定義だけ与えられるなら、(8)のような表現は、「おかしい」表現であるということになるはずである。このように見てくれば、これらの辞書の定義が妥当性に欠けるということは、納得がゆくであろう。

辞典においては「皮肉」の説明に、「おかしみ」が含まれることがあるという主旨のことが一貫して落ちていることは、言語文化学的には、非常に興味深い現象である。いずれ機会があれば考えてみたい。なお、以上の論考では、皮肉と irony とはかなり重なる部分があるという前提に立って考えてきたが、(6)や(7)の定義を sarcasm の定義と比べてみると、皮肉は sarcasm とかなり重なる

部分もあるようである。(斎藤助教授の指摘による。) 皮肉と irony と sarcasm の関係をベン図で表わすと、概略、次の(9)のようになるであろう。

(9)



現在のところ、この三者の共通部分と異なる部分の詳細については明らかではないが、英語の辞典と国語辞典の定義を比べた限りでは、皮肉と sarcasm の類似は相当のものであるようである。ただし、注10で述べたように、辞典の定義は今のところ、十分信頼に足るものではないので、決定的なことは言えない。くわしいことについては別の機会に考えたいと思う。

参考文献

- Davis, A. E. (1976) "A Debater's Art is All Wit and Witticism," *The New York Times*, Sun, Sept. 19. p. 2.
郡司利男(1975a) "「何を言わないか」の言語学" 『英語青年』(3月号) 120: 12. p. 25.
——(1975b) "「何を言わないか」の言語学" 『英語青年』(6月号) 121: 3. pp. 106-107.
原口愚常(1976) "マカロニ語 (Macaronics) の諸相" 『言語生活』305号 (2月号) 53-63.
安井 稔(1976a) "皮肉への道一言の意味と言外の意味(24)" 『英語青年』122: 6. 274-75.
——(1976b) "皮肉の条件一言の意味と言外の意味(25)" 『英語青年』122: 7. 324-25.
——(1976c) "皮肉の否定一言の意味と言外の意味(26)" 『英語青年』122: 8. 362-64.

10) もっとも、皮肉がユーモアになりうるのは、話者と皮肉が向けられていない人だけである、というべきであるかもしれない。あることを人知れず病んでいる場合には、そのことを皮肉られた場合、その人にとってはひどい心の痛みを伴うことになることが多い(安井泉講師の指摘、個人談話)。ふだん平気な顔をしていても、われわれにはこのような面が少なくないことは事実である。このように見てくれば、皮肉の定義には、皮肉を言われた側と皮肉を言う側からの規定が必要となる、という結論が得られる。

(p. 43よりつづき)

‘(as)~as...’型は、(1)で分類した(C)(D)(E)のように、‘(as) Adj as N’のNおよびAdjの部分が、それぞれ2語またはそれ以上にわたることが可能である。N, Adjの各部分が大きくなれば、それだけ精細な表現も可能となるであろう。“小回り”のきく複合語型は付加的に用いられることが多く、そこで本領を発揮するのにたいし、‘(as)~as...’型の本領は叙述用法にある。叙述的に用いられれば、当然、文尾(節尾)にくる可能性が大きいことになる。‘(as)~as...’が文尾にきてそこが重

くなれば、バランスのとれた文構造となり、stabilityを生むことになる。では複合語型はどうか。複合語型は付加的に用いられることが多く、したがって、文の途中にくることが多い。そして構造的に軽いので、文構造のバランスを崩さずうまくおさまるはずである。

以上の考察から、結論的に次のように言うことができる。たがいに相反する性格をもつ2つの型の直喩表現が、それぞれの特徴を生かしながら領域を分け合い補完し合っているのが現状であると考えることができる。

(札幌大学外国語学部教授)

現代英語における直喩表現

—‘(as)~as...’型と複合語型—

TOYAMA TOSHIO

外山敏雄

形容詞を含む直喩表現には, ‘(as) white as snow’ 型, ‘white like snow’ 型, ‘snow-white’ 型, ‘snowwhite’ 型, ‘snowy-white’ 型, ‘snowy white’ 型の6つがある。

直喩表現を統計的に調査したものに倉田達氏の研究¹⁾がある。それは、主に19世紀以後20世紀の40年代までの文学作品を資料として慣用的直喩表現を求めようとしたものである。そこに示されている「主な用例」(pp. 181—188)を、いま上の類別に分類してみると, ‘(as) white as snow’ 型が28例と圧倒的に多く、以下の型はそれぞれ3, 5, 2, 0, 4といずれも少数である。

今日の英語にめだつのは, ‘(as)~as...’ 型とともに, ‘snow-white’ のような, N-Adj という構造の複合語形式のものである。

筆者は最近 *Reader's Digest* 誌の本国版26冊を資料として調査をおこない、その中に含まれる ‘(as)~as...’ 型と複合語型 (N-Adj 型) のすべての用例を記述報告した²⁾。得られたのは前者103例、後者80例であった。

本稿では、上の調査で得られた用例を検討し、今日の英語で中心をなすとみられる2つの直喩表現を比較してみることにした。

(1)

まず ‘(as)~as...’ 型から用例を検討してゆくことにする。用例を、文中での機能からみて、形容詞的なものと副詞的なものとに分けるのが好都合であると思われる。形容詞的機能のものは、さらに、叙述用法 (predicative use) と付加用法 (attributive use) に2分できる。以下、上のように分類して用例をあげてみる。

<形容詞的・叙述用法>

Seen from the outside, a stained-glass window looks *as drab as the wrong side of a butterfly's wing*. (Sept.'73).....1a

1) 『英文法論叢』篠崎書林, 1971 所収。

2) 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』Vol. 10, No. 1; Vol. 10, No. 2.

Some of these speeches are *as accurate as a sociologist's research report*,... (Apr. '73).....1b

<形容詞的・付加用法>

Barefoot, we kicked down back roads in dust *as soft as brown talcum powder*. (Jun. '73).....2a

Supermarkets operate on profit margins *as thin as wrapping paper*;... (Jul. '73).....2b

<副詞的用法>

'I left the dishes for you for a change,' I said, *cool as a revolutionary*. (Mar. '74).....3a

Then, *quiet as a serpent*, I slipped through the back gate. (Sept. '73).....3b

以上用例を若干あげてみた。‘(as)~as...’ 型のすべての用例 (全く前後関係のない4例³⁾を除く)を類別してみると次のようになる。

{	形容詞的・叙述用法.....64例 (64.6%)
	形容詞的・付加用法.....24例 (24.2%)
	副詞的用法.....11例 (11.2%)

形容詞的で叙述用法のものが全体の約3分の2を占めているのである。

用例を見渡してひとつ気がつくことがある。従来<慣用的直喩>とされてきた定型的なモデルの実例が意外に少ないことである。たとえば、『英語学辞典』(研究社, 1953)の‘simile’の項には<日常用いられるものの中の約100種>があげられているが、それらのモデルと全く同じ形の直喩の実例は103例中次の2例だけである。

She had her own little security blanket, and was *as good as gold*. (Jul. '72)

Your classes are scattered, but fortunately the routes to all of them are *straight as an arrow*. (Aug. '72)

『英語学辞典』のモデルをみてもわかるように、従来<慣用的直喩>として示されてきたもののほとんどは、

‘(as) × 1つの形容詞 × as × 1つの名詞’...(A)

という構成か、それに冠詞が加わった

‘(as) × 1つの形容詞 × as × 冠詞 × 名詞’...(B)

の形をとるものである。いま、調査で得られた103例について改めてその点を見ると、(A)23例、(B)22例と、実例では両型合わせて全体の半数に満たないことがわかる。残り58例は次の3つのいずれかである。

‘(as) × 1つの形容詞 × as × 2語又はそれ以上の語群’
.....(C)‘(as) × 2語又はそれ以上の語群 × as × 冠詞 × 名詞’
.....(D)

3) ‘Toward More Picturesque Speech’欄にあるもの。

'(as) × 2 語又はそれ以上の語群 × as

× 2 語又はそれ以上の語群 '……(E)

(C)(D)(E)の用例数はそれぞれ 42, 5, 11 である。(C)の型が 5 つの型の中で断然多く、全体の 40.8% を占める。前掲の 1a のように、末尾のところによく多くの語がくる例もかなり多い。

(2)

以上 '(as)~as...' 型をみたが、次に複合語型 (N-Adj 型) を検討してみよう。まず、前節にならって 3 つに類別して用例をあげてみる。

<形容詞的・叙述用法>

His appetite would be wolfish, yet he would remain *rail-thin*. (Nov. '72)……4a

After waiting in there hours for a quiet moment for filming, I had become *dog-tired*, tense, so I slipped. (Jul. '74)……4b

<形容詞的・付加用法>

Then there's your *pitch-dark* night; the river is a very different shape on a *pitch-dark* night from what it is on a starlight night. (Aug. '73)……5a

Often I chopped in *cinder-soft* darkness, my blade flashing like a mirror. (Jul. '73)……5b

<副詞的用法>

She was then able to slice them *tissue-thin* so that they could be stained and observed. (Mar. '74)

……6a

I straightened a faded, tawny ear (*i.e.* of a hound), *silk-warm* in the sunlight. (Jan. '73)……6b

以上、用例を若干あげてみた。'(as)~as...' 型では、形容詞的で叙述的に用いられるものが全体の約 3 分の 2 を占めたが、複合語型ではどうであろうか。全部の用例を分類集計すると次のようになる。

- { 形容詞的・叙述用法……15例 (18.7%)
- { 形容詞的・付加用法……58例 (72.5%)
- { 副詞的用法……7例 (8.7%)

'(as)~as...' 型の場合と逆に、付加的に用いられるものが多く、7 割強を占めている。

用例を検討して、注意すべき 1 つの事実が気がつく。'(as)~as...' 型の用例の中には従来 <慣用的直喩> として示されてきたモデルの実例は僅か 2 例と、意外なほど少なかったが、実は、複合語型の用例の中に、'(as)~as...' の形に組みかえれば、<慣用的直喩> として示されてきたものと同じものになる用例がかなり見られるのである。いま、(1)でふれた、『英語学辞典』の示すモデルと、組みかえれば同じものになるものを、本節にあ

げた用例の中から下に示してみる(*を付したものは不定冠詞をつけ加えることが必要)。

rail-thin* <4a> dog-tired* <4b>

pitch-dark <5a>

'(as)~as...' 型の <慣用的直喩> が複合語型へ移行するけはいがうかがわれるのである。

(8)

これまでの考察から得られたデータをもとにして、以下、2 つの直喩表現の比較を論じてみる (形容詞的用法を中心に考える)。

'(as)~as...' 型と複合語型を比較して、ひとつ言えることは、複合語型は 1 つの名詞と 1 つの形容詞との結合に限られる (少なくとも用例にみる限りは) ことである。しかも音声的に制約をとまうのである。同じ 1 語でも N の音節数が多くなれば、N-Adj の結合は rhythmicity を失って awkward なものとなるからである。(N が 1 音節のもの 52 例、2 音節のもの 28 例で、3 音節以上のは見られない⁴⁾) 複合語型の成立は、名詞と形容詞の結合が生みだす rhythm に大きく左右されるのである。

こうした決定的な制約をもちながらも、複合語型の使用が今日 '(as)~as...' 型にほとんど迫るほどの頻度にはぼるのは、その圧縮された形のもつ“機動性”によると言える。'(as)~as...' 型の直喩が付加的に用いられる場合、一般に、

N × (as)~as...

と、“後位”の位置をとらなければならない。その場合、さらに、動詞などの文構成要素が後続するなら、awkward な文になる可能性が出てくるであろう。こうしたところに '(as)~as...' 型の限界があるのであり、'(as)~as...' 型に付加用法が少ないのは、ひとつには、そのためであろう。(2)でみたように、複合語型は付加的に用いられることが多く、それが 7 割強を占める。(名詞に対して) 前位に立ち、そこで複合語型はその本領を発揮するのである。'(as)~as...' 型の <慣用的直喩> とされてきたもの (末尾が 1 つの名詞か、それに冠詞を加えた形が多い) が複合語型に移行する可能性もこのようなところから出てくるであろう。

複合語型の直喩表現の成立が rhythm に左右されるのにたいして、'(as)~as...' 型は、もともと、その構成からして、rhythmical なものとなる可能性をもち、その面からの制約はほとんどうけない。複合語型は名詞・形容詞各 1 語の結合に限られるであろう。それにたいして

(p. 41 へつづく)

4) 前掲拙稿 (Vol. 10, No. 2) 参照。

新刊書評

『カレッジクラウン英和辞典』

第2版

大塚高信・吉川美夫・河村重治郎共編
三省堂刊, B 6 判変型, xvi+2301 pp., ¥3,200

MIURA SHIN-ICHI
三浦新市

このほど『カレッジクラウン英和辞典』第2版が出た。昭和39年の春初版が出て以来、実に13年ぶりの全面改訂である。初版は例文が多くて活用度の高い辞典であった。しかし、この13年間における目まぐるしい世界情勢の変化によって言語環境もかなり変わり、初版のままではこの変化に対応することはむずかしくなっていた。第2版は旧版の特色を残して、この対応し切れなくなった面を解決しようと努力している。すなわち、第2版は、語・語句(詳しい説明つきの固有名詞を含む)を大幅に追加して、語義を増補・修正し、語法・文法記述を追加・訂正して、類語の意味記述を追加し(もちろん、発音表記その他の面でも改良工夫がされている)、旧版よりもはるかに活用度が高くなったと言えよう。

まず、他の辞典では殆んど扱っていない、第2版に収録された比較的新しい語として、derestrict, nosh-up, pelican crossing, transport café, carryon, ecocide, libber, pull date, superstore などが目につく。旧版にはなく、第2版に追加された語・語句はいろいろな分野にわたるもので、その数は非常に多い。A-frame, airtel, automanipulation, be-in, body language, body shirt, bunz, buzz session, cassette, chairperson, chauvinism, chef's salad, chicanismo, cluster college, cobblers, communication engineering, computerize, deep structure, distributive education, docking, dope peddler, dropout, easy rider, eye chart, expo, enduro, fast-food, finger food, five-o'clock shadow, free rider, Freedom Rider, frontlash, funny farm, G (入場に年齢制限のない映画の表示マーク), garage sale, garment bag, gee-whiz, geostationary, gut course, Gray Panther, hit man, hot pants, hydronaut, ice-cream chair, indexation, in-flight, in-house, Jesus Freak,

kineticism, knee-jerk, lidar, limo, lit-crit, love-in, magic number, masscult, MIA, microculture, mimem, Molotov cocktail, mono, morning-after pill, Ms., natural food, natural trail, New Town, nondairy, nonevent, no-no, object language, old-money, opera window, oracy, organo, parajournalism, parakite, paralanguage, paralinguistics, paraprofessional, peacenik, personal tax, promo, rap session, safety man, samizdat, SDRs, senior citizen, sexism, shoot-'em-up, short fuse, sick-out, slammer, slurb, smart bomb, sociocultural, socioeconomic, sociolinguistics, spokesperson, stereophone, still bank, student union, subcompact, subemployment, supremo, surf and turf, surface structure, tachograph, tag sale, talk-in, tank suit, tax haven, teach-in, teeny(n.), technostucture, teeny-bopper, terrace house, Terran, third-stream, tot lot, transracial, up front, U(上流階級の), Uncle Tom, Uncle Tomism, underclass, underwhelm, vaccinee, vegan, VTOL, wimp, women's lib, workfare, Xanadu, Xerox, yard sale, yó-yó, zaftig, ZPG などは追加された語・語句の一部である。

語義の与え方はこの辞典の特色の一つで、訳語だけでなく、その内容まで説明するという丁寧さである。たとえば、見出し語 thirteen にある unlucky thirteen について「不吉の十三(処刑前にキリストが12人の使徒と食事を共にしたことから13の数を不吉とする欧米の迷信; この故事より食卓の13人, ホテルの客室番号の13などは避けられる; 13日が金曜日に当たるといっそう不吉)」と説明しているが、このような詳しい説明はどの英和辞典にも見られないのではあるまいか。ribbon development 《英》についても同じことが言える。また、文法用語(たとえば, gerund)の場合にも訳語だけにとどまらず、定義・用法(例文を含む)まで記述しているので、わざわざ文法書を見る必要がないくらいだ。百科的語いの説明もすぐれている。たとえば, miniskirt の場合、他の辞典は「ミニスカート」と片仮名で置き換えただけであるのに対し、第2版は「1960年代の後半 Liverpool 出身の服装デザイナー Mary Quant による考案が世界的にひろまった」という説明までもつけ加える丁寧さである。Seven Sisters も同様である。

社会の変遷に伴ない、語義の追加も当然起こってくる。第2版では語義の追加は実に丹念に行なわれている。次の例はその一部である。anchor 4 《米俗》(自動車の)プレーキ/ballpark a. ほぼ正確な/condominium 2 《米》分譲マンション/cosmetic 2 《米》表面的な;

つっこみの足りない/D. A. (米) Doctor of Arts/freak
5 (米俗) ヒッピー/groove 3 大いに楽しむ/low-rise
2 (ズボンが) ヒップボーンの/module 4 他の構成要素
と組み合わせて使用できるよう設計された連続機単位
の一つ, ユニット 5 (ロケット) 宇宙船の一部だが母船か
ら分離して作動できるもの/Moslem 2 (米)=Black
Muslin/pop v.t. 6 (薬を) のむ/tad 2 わずかな量
[程度].

成句・熟語の面でも大幅な追加が行なわれている。た
とえば, have had one's chips/That's [It's] the gear.
(俗)/sweat [work] one's guts out (話)/(You) bet
your life/in good nick (話)/keep one's nose clean
/drive a person up the wall (話) などは他の英和辞
典には殆んど出ていないようである。

次に, 語法・文法の記述の面でも古くなった記述を修
正・加筆し, 現実の語法を反映した記述にしようとする
跡が見られる。たとえば, 旧版では見出し語 tired で
語法記述なしに be tired with [by] reading をあげて
いるのに対し, 第2版では「from の代わりに with を用
いるのは今はまれ」と記述して, 用例を be tired from
reading に書き改めている。また, 旧版では shy のと
ころで She is shy of meeting strangers. をあげて
いるが, 第2版では She is shy of [(米) about] meeting
strangers. と修正し, 米英語法の違いを明らかにして
いる。full の語法でも, 旧版では ad. のところで「数詞の
前後で」と記述して The storm raged for full three
hours. をあげていたが, 第2版では a. のところで three
full months=a full three months ... (fully three
months) に修正している。また, end では at loose
ends に (米) の表記をしているし, sightseeing では旧
版の go sightseeing を, 第2版で go sightseeing in
Kyoto と拡大して活用度を高めている。文法事項の扱
いでも実に丁寧で, たとえば, prefer では「prefer とそ
の目的語」という見出しをつけて例文をあげ, 10行にわ
たって解説している。また, comprise では「比較」と
いう見出しをつけて comprise, compose, constitute の
用法を例文で示しているが, 他の英和辞典では見られ
ない記述ではあるまいか。

関連語は第2版で付加された特色の一つであろう。見
出し語 cat に「関連語」という見出しを設けて “tomcat
(雄), she-cat (雌), neuter (去勢ネコ), kitten (子ネ
コ), tabby (トラネコ), litter (一腹の子), puss, pussy
(愛称), grimalkin (老いた雌ネコ); feline a. (ネコ
の); caterwaul, mew n., v. (鳴き声)…” などをあげ
ている。利用者には実に便利である。

以上のように, 第2版は, 利用者の立場を念頭におい
てすべての項目にわたって大幅な増補・拡大・改良を断
行しているのだから, 他の英和辞典では見られないすぐれた
面を数多くもち, 活用度の高い辞典と言えよう。

しかし, 第3版でぜひ次の項目を考えていただきたい
と思う。<追加したい語・語句>compact home, mobile
home, trailer court, tract home, apartment complex,
sports complex, petro-chemical complex, gas hog,
compact car, short order restaurant, take-out place,
studio apartment, open home, open university/
<追加したい語義・説明>cabin 「(小) 別荘」/studio
=studio apartment/office 「(大学教授の) 研究室」/
moratorium=a peaceful strike. Cf. I think it is sig-
nificant that my students at Amherst called their
peaceful two-day strike not a “protest,” not a “de-
monstration,” but a “moratorium.” — James
Kirkup, *Students Now* (Tokyo: Seibido, 1970), p. 49.
/“bourn², bourne² 3 限界, 境界” とあるが, the un-
discover'd country from whose bourn no traveller
returns (Shak., *Hamlet* III. i. 79-80) の引用によって象
徴的意味の手がかりとなるので, この引用を入れて欲
しい。/<追加・修正したい語法項目>lest の例文に語法
レベルを表記する。/afraid と very, much の語法記述
を再検討する。/audience の例文 ... my audience are
with or against me. と語法記述「聴衆を個々に見た場
合は複数扱い」を再検討し, 米英語法の違いを記述す
る。/distant の例文 The town is distant from our farm.
は語法上容認されないのだから, The town is a long way
from our farm. The town is a great distance from our
farm. The town is quite distant from our farm. The
town is quite away from our farm. It's quite a distance
from the town to our farm. It's a long way from the
town to our farm. のようにすれば容認される。distant
は次のように “vast distances—almost incalculable
distances” すなわち, “solar and cosmic distances”
について叙述する場合に用いられる。The moon is dis-
tant from the earth. また, 問題の例文は The town is
three miles distant from our farm. とすれば容認され
る。/this day week; today week はアメリカ語法では
用いられないのだから, a week from today, a week ago
today も追加して欲しい。/course の用例 in course of
construction はイギリス語法では用いられるが², アメリ
カ語法では用いられない。in the course of construction
(米) も入れて欲しい。/meet の例文 I met with a
(p. 47へつづく)

新刊紹介

■『異文化を越えて』

——国民外交と行動科学——

G. フィッシャー 著
國弘 正雄 訳
川瀬 勝 訳

今まで社会科学の中で、もっとも客観的な科学の眼で熟視し分析すべき領域でありながら、不幸にして最も遅れていた分野は「政治学」、なかなか「国際政治」や「外交」という場であった。

力関係とイデオロギーと個人資質論だけで片付けられてきたこの領域に対し、行動諸科学の発想と枠組みを援用しつつ、果敢にも、この巨大なレビアタンの“暗黒大陸”に、挑んだのが、このグレン H. フィッシャーの1972年の労作である。

行動科学を修め、正規の外交官としての経験を有し、米国国務省の外務研修所の所長というキャリアの持主である著者のこの新しい意欲的な試みが、外務省参与で国際商科大学教授、しかも言語文化人類学を専攻する國弘正雄氏らの手によって今回訳出されたことは、最適のコンビによる訳業が成されたといえよう。

行動諸科学の成果とアプローチの中から幾つかの主要なしかも比較的固まってきたものを選び、それを拠り所にして著者は国際外交のジャンルを踏みわけて入って行くのだが、正直言って、この努力も入口から数十マイルのところまで止まってしまった感じがする。しかし、心理学からは比較心理説を、社会学からは社会構造論を、文化人類学からは民族や文化の価値観を、その他一般意味論な

どを駆使したこの新しい企画は、部分部分ではあるがハットするような新しい洞察をわれわれに投げかけてくれる。(例えば、カーターの人権外交の背景とソ連の漁業交渉の心理を第六章ははからずも教えてくれる。)

このところ日本では、企業なりビジネスの国際化対応の方が先行し、外交や政治の即応化が遅れているが、こうした時に、広い意味での入門書であり序説である本著が訳出されたことは誠に意義深いことである。また、政治や外交や国際関係論に関心ある人にとってのみでなく、経済やビジネスにも携わる人人、そしておおよそクロス・カルチャルなものに興味ある人々に広く推薦したい好著であるといえよう。

(ELEC 出版部刊, B6判, 286pp., ¥1,600)
(産業能率短期大学教授 小林薫)

■『FEN のきき方』

渡辺 千秋著

日本でいちばん簡単に聞くことのできる英語の放送は、日本に駐留しているアメリカの軍隊とその家族向けのFEN (Far East Network) 放送であろう。この英語放送を聞く日本人の数も年ごとにふえ、現在ではアメリカ人よりも日本人の聴取者の方が多いのではないかとわれている。FEN 放送を聞く大半の日本人は、英語を学ぶためにこの放送を聞いているものと思われるが、本書はそういう人達のための恰好な手引き書となるであろう。

著者の渡辺氏は、かつてFENに勤務していたことのある人だ。その体験が、第1章 Far East Network について、第2章 FEN の番組などの記述にうまく生かされている。

第3章と第4章に解説されている

ニュース英語の特徴は、時事英語を学んでいる人たちを対象に書いたものであろう。FEN 放送からの引用が多く役に立つが、やや手薄な感じでものたりない。もう少し体系的な研究を目指す読者には、関根応之氏の『放送英語』(朝日出版)が参考になると思う。

英語ニュースの聴き取りについては、第5章から第8章にわたって具体的にわかりやすく解説されている。ここいらは、おそらく著者ももっとも力を入れて書かれたところではなかろうか。特に第6章のヒアリングの難点、第7章 聴き間違えやすい発音は、FEN の聴き取りに苦心している人たちにとって、読みごたえがあるだろう。英語を母国語とする人がよく行なう音の連結——after ~all / at ~all の解説や、聞き間違えやすい語句——are expected→an expected などの数多い具体例は、FEN 聴取のための良い参考になる。

第8章では、アメリカ英語の発音の特徴を解説しているが、water ワーラー、ウォーラー、ウワーラー、better ベラ、city スイリイなどの仮名表記を多用しているのには、賛成しかねる。これらの仮名表記は著者が主張しておられる「正しい発音とhearing 能力」(pp. 102-103)の妨げになるだけで、何の役にも立たないと思う。版をあらためる時にでも思いきって削除するようおすすめしたい。

(ジャパンタイムズ刊, B6判, 191pp., ¥800)

(お茶の水女子大学教授

長谷川 潔)

☆

☆

新刊案内

『英語発音のコツ』 東後勝明著 B 6判, 205頁, 980円 金星堂

日本人一般の弱点として、聞き、話す力が不足していることはよく指摘されてきているが、これまでの発音指導が解剖学的な口腔図を用いての静止状態の指導が多く、実践的な指導・訓練が少なかった点に起因するといえよう。本書は、ことばは生きている、生かさなければならぬという当然の前提から、日本語とは異質な英語発音のエッセンスを「言い方のコツ」、「聞き方のコツ」に分けて50の“音の法則”にまとめ、これまで聞きとれなかった原因、通じなかった原因を解明し、各音の発音から子音連結、コントラクション、リズム、ストレス、イントネーションの要点を示し、よく用いられる表現を練習問題として付してある。

『続・英語にならない日本語』 最所フミ著 B 6判, 205頁, 900円 研究社

従来の和英辞典では英語で表現するのが困難なこなれた日本語を、英語の発想の深みにさかのぼり、「日本語と同じレベルの感度にまで引き上げられた英語」にし、50音順に配列し、ローマ字索引を付した和英表現辞典、先著と比較して、50音順に配列したこと、表現が一層現代的な点に特徴があるが、「ういういしい」、「自主性」等の説明にみられる日英両文化の発想の相違点の比較は少なくなっている。

『英語のでこぼこ道 私のアドバイス』 西山千著 四六判, 233頁, 980円 サイマル出版会

(p.45よりつづき)

friend in the train. は、イギリスでも容認しない人がいるので、met(with)のように表記し、アメリカ語法で用いられるmet a friend on the train も入れる。/tripの用例 “make [take] a trip to ...” は意味・語法も同じように扱われているが、両者の違いを記述して欲しい。(『新コンサイス英和』を参照のこと。)/forgetの用例 forget one's umbrella を再検討のこと。I left my umbrella on the train. がふつうに用いられる。拡大した表現 I forgot my umbrella and left it on the train. はアメリカ口語で用いられる。/forget ~ing; forget about ~ing の型も入れて欲しい。/(be+自動詞過去分詞)の例文 All the guests are arrived. は現在用いられなくなっているので、change, finish, grow などを用いた別例にして欲しい。/northの用例 “on the north of Tokyo 東京の北側に接して” は語法上容認されない

英語と日本語を母国語とし、それだけに両語のむずかしさを根底的にとらえている著者が、英語の盲点と英語上達の正道を示した英語を学ぶ人のための好エッセイ。

『アメリカのうた』 高山宏之著 A 5判, 178頁, 1,400円 研究社

カウボーイ・ソングから国歌までアメリカ人の愛唱歌30曲を解説し、アメリカ文学との関連から、民謡につきものの恋愛観、残酷さにも触れ、愛語されている秘密をも解明した“アメリカのうた”、“アメリカ人の感受性”への案内。

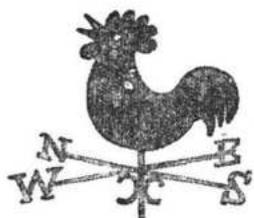
『サーカスが来た! アメリカ大衆文化覚書』 亀井俊介著 四六判, 350頁, 1,300円 東京大学出版会

アメリカといえば「民主主義の教師」、あるいは「帝国主義の元凶」といった理念的研究が一方にあるが、日本への影響という面では戦後の占領時代以降映画・ポピュラー音楽等も圧倒的といえる。正統的なアメリカ研究の成果を背景に、西部劇のヒーローたちやターザンに焦点を合わせ、「民衆の国アメリカ」の大衆文化を愛着をもって論じ、日本文化への衝撃を考えるエッセイ。

『内村鑑三 明治精神の道標』 亀井俊介著 新書判, 225頁, 380円 中央公論社

儒学者の家に生まれ、キリスト教国アメリカとの対決を通じて精神形成を行ない、矛盾する確信を持って近代化の日本で逆の対決を強いられて生きた内村鑑三の足跡をたどり、今なお未解決の日本近代化の精神的側面に照明を与えている。

ので、Tokyo adjoins (or bounds) Kawaguchi on the north. と修正したらどうであろう。/“-in² [-in] suf. 動詞のあとへつけて「社会・政治・文化集会」を意味する名詞をつくる”と記述しているが、次のように名詞のあとに-inがつくこともある。baby-in, tree-in. この場合にも-inは“mass activities”を表わす。/“(in)these days ... (米)ではinを加えない)”とあるが、イギリス語法でも現在はthese daysだけが用いられる。なお、these daysは“in these days of +句”“in these days when+節”と区別して考えなければならない。両表現のin these daysはthese daysに比べて“a broader rhetorical flavor”をもつのである。詳しくは『続・英語語法大事典』(大修館書店), pp. 602-606を参照されたい。(慶應義塾大学教授)



展望 通信

◆1977年 ELEC 夏期英語教育研修会

A. ELEC 会場 (通学制)

期 間 7月25日—8月5日

会 場 ELEC 会館

B. 九州地区会場 (合宿制)

期 間 7月25日—7月31日

会 場 高千穂荘 (鹿児島県始良郡霧島町田口)

C. 八王子会場 (合宿制)

期 間 8月15日—8月21日

会 場 大学セミナーハウス (八王子市下柚木)

詳細については 〒101 千代田区神田神保町3—8
英語教育協議会 S P 係あて問い合わせられたい。

◆第8回イングリッシュ・ギャラクシー

期 間 7月26日—7月29日

会 場 神戸市六甲山・YMCA 研修センター

会 費 35,000円

対 象 中学, 高校, 大学, 一般

定 員 100名

申 込 先 〒107 港区赤坂2—17—69 トミー植松語
学センター

◆ELEC 月例公開講座

ELEC 会館を会場にして下記公開講座が開催される。
入場無料。

日 時 7月2日 14:00—16:00

講 演 者 お茶の水女子大学助教授 池田摩耶子

演 題 「日本語再発見」

◆ELEC 夏期英語講習会

A. 英会話集中コース

期間 7月25日—8月12日 (午前部・夜間部)

会費 31,500円

B. 中学・高校生コース

期間 8月1日—8月12日

会費 12,000円

C. TOEFL 受験コース

期間 8月26日—9月16日

会費 64,500円

詳細については 〒101 千代田区神田神保町3—8

ELEC 英語研修所あて問い合わせられたい。

◆ELEC 研究グループ

ELEC 情報・資料収集および分析研究グループの研究
員として以下の諸氏が委嘱された。

田中 春美 南山大学教授

玉崎 孫治 南山大学助教授

有元 将剛 南山大学講師

大塚 達雄 南山大学講師

◆ELEC 人事

以下の諸氏が ELEC 常務理事および評議員として選
出された。

<常務理事> 清水 護 東京女子大学教授

朱牟田夏雄 帝京大学教授

<評議員> 船木 重光 公認会計士

木田 宏 文部事務次官

小暮 和男 国際テレビフィルム株式

会社社長

Douglas. W. Overton

貿易研修センター特別顧
問

金原 経 ELEC 総務部長

◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるい
は英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目
的で「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集
しています。原稿の締切は9月末日で、わが国の英語教
育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接貢献す
るところ大と認められたもの一件に対し、ELEC 賞が授
与されます。

◆原稿募集

『英語展望』では読者から原稿を募集しております。
内容・分量とも制限がありませんが、未発表のものに限
ります。掲載分には規定の原稿料をお送りいたします。

英語展望 (ELEC Bulletin)

第58号

定価 530円 (送料 120円)

昭和52年7月1日 発行

©編集人 中 島 文 雄

発行人 酒 井 杏 之 助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 89111 ~ 89116

振替・東京 3—11798

ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC